
君が僕にくれたもの

山口維音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が僕にくれたもの

【Nコード】

N1276A

【作者名】

山口維音

【あらすじ】

少年院を出た真夜は保護官のすすめでサナトリウムでボランティアをすることになった。ある事がきっかけで心を閉ざしていた真夜だったが患者である美岬と出会い、徐々に癒されていく。しかし真夜の前には様々な出来事が待ち構えていた。

プロローグ

“どこへ行きたい？”と僕が尋ねたら、君は“海！”と大きな声で答えたね・・

“こんな真冬に海？”そう聞き返すと

“次の夏にはもう行けないから・・”

・・君はそう笑いながら答えた・・

“生まれ変わったなら何になりたい？”そう尋ねたら、君は“満天に輝く星！”とつぶやいたっけ？

“星？どうして？”と聞くと

“ずっとあなたと同じ距離でいられるから・・”

・・君はそう笑いながら答えた・・

“大きくなったら何になりたい？”と聞いたら、君は“何もないよ”と答えたね。

“何も？”僕が聞き返すと、“大きくなかなれないから”

・・そしてまた笑ってたよね・・

“俺のこと好き？”って聞くと、君は“好きじゃないよ”と笑ったね。

“じゃあ嫌い？”そう悲しげに聞くと、“ううん愛しているの”

・・君と僕は笑ってたね・・

“俺に何かできる事はある？”そう尋ねたら、君は“あるよ”と言った・・

“何？”そう聞くと

“私が死ぬ時、そばにいないでね・・”

・・君はそう泣きながら答えた・・

そして・・三年前彼女はこの世を去った・・
そして今頃風になって自由に舞っているのかな・・

君が言ったとおりいつか星になるのかな・・

でも僕の願いは生まれ変わっても君は君でいること。

そして一緒に夏の海に行こう？

コートやマフラーなんか脱ぎ捨ててさ…

“何が食べたい？” “かき氷！” そんな会話もしながら。

きつとその時の君の笑顔が一番輝いているんだ…

だから待ってて？

そこから俺を見ていて？

愛する美岬へ…

君との始まり

「相田真夜、おめでとう。卒業だ。」

重い鉄の扉が開くと共に、その一言が響いた。同じ部屋の奴等からは、拍手と一緒に羨ましがる声もちらほら聞こえる……。だったらてめー等も俺みたいに“真面目”にしてりゃいいんだ。でも、真面目にしてりゃ、こんなところには入ってないか。

そう、ここは少年院。俺はここで2年間過ごした。理由は暴走族のリーダーだった2年前、傷害事件を起こしたからだ。しかしいざ入所してみると、看守共にはこき使われるわ、誰も見ていない所で殴られるわでろくなことがない。こんな最悪な所を出るにはただ一つ・誰もが認める模範囚となって入所期間を短くすることだった。そして、2年後の今日。俺はここを出ることになった。

しかし、出所しても俺を迎えに来てくれる奴はいない。親父とおふくろは離婚していて、両方とも別の奴と再婚してやがる。仲間は俺が今日出所することすら知る訳がない。というわけで、保護監察官のおっさんが俺をアパートまで送るそうだ。

「真夜、ボランティアをしてみないか？」

車に乗ろうとした時、監察官の三田が話しかけてきた。

「ボランティア？」

しかめっ面で俺は聞き返すと、すぐに助手席に座った。続いて三田も乗り込み、車を発車させ再び話を続けた。

「そうだ。私の知り合いが院長をしているサナトリウムでな。これまで少年院を出た奴も何人かそこでボランティアしてきたんだ。どうだ？ どうせしばらくは君もする事がないのだろう。やってみないか？」

「やだ。そんな一銭にもならないこと。」

三田の誘いを即答で断ってやった。今まで年少の中でボランティア

活動してきたのに、出所してまでやってられるかってんだ。・・・しかし、そんな俺の言葉なんか無視して、三田は俺のアパートとは逆の方向へ車を飛ばして行った。

「おいっ、こらオッサン！俺のアパートはこっちじゃねえよ」

俺のそんな声も聞こえていないのか、三田は悠長にハンドルを回していた。そんな勝手な行動にこの俺もただ哑然としていた。大人しくなった俺を見て、三田は少し笑っていた。フンっどうしてこんな奴が俺の監察官になったのか・・・。

小一時間程して、やっと例のサナトリウムに到着した。三田は嫌がる俺の腕を引っ張り、院長室へと向かっていった。

「加賀ー。また一人出所したんだ。ここで使ってやってくれるかな？」

「もちろん大歓迎だ。こっちも人手が足りなくてね・・・ええと？」

加賀と呼ばれた院長は椅子から立ち上がると、俺の方を見上げていた。すると、三田が俺の背中を軽く押した。

「あっ・・・相田真夜20歳。傷害事件で年少に2年間入っていました。特技はナイフを使いこなすことです。」

と、自己紹介にはふさわしくない言葉を言ってやった。目的はもちろん、ここの院長に嫌われてさっさとアパートに帰ることだった。しかし加賀は、

「ハイ！今日からよろしくね。頼むよ」

そう思いがけない返事をしてきた。何だこいつ、俺の言ってる事がわかってねーのか？変な奴ばかりだ・・・。

三田と加賀の勢いについていけない俺は、しぶしぶこのサナトリウムで働くことを承諾した。加賀から一通り説明を聞いた後、三田は俺を置いて帰っていった。

ボランティアの内容は掃除が主の雑用だった。ここには爺さん、婆

さん、そしてクソガキなど色々な人間がいる。加賀は俺を一階の廊下に連れてくると、

「じゃあ、相田君。この一階から三階までの廊下全てモップがけしておいてね。」

そう軽く言うのと、加賀は院長室へと去っていった。このバカでかい施設の廊下全て・・・

「やってられっか！」

モップを壁にぶつけタバコを吸おうとしたその時、俺の傍にいたババアがじっとこっちを見ていた。

「なっ、なんだよ」

しかしババアはじっと俺を見ていた。何か調子が狂った俺は倒れていたモップを持ち、タバコをポケットに入れ、キュッキュツと廊下を磨き始めた。それを見たババアはコクコクと頷き、また去っていった。本当に変な奴等が多いな・・・ここは。

三階に入った頃には既に太陽も沈んでいた。三階は主に重い病を患う患者の病室があると聞いていたので、こんな所は適当にさっさと片付けてしまおうと思った時だった。

「キヤーっ誰か止めてー！その子をつかまえて！」

という看護婦らしき女の悲鳴が聞こえた。そして俺の方に向かって一人のガキが突進してきた。

「お願いっその子をつかまえて！」

看護婦の言葉に思わず反応してしまい、そのガキをつかまえようとしたその時・・・

ドカツ！

と、いう音と共に俺は倒れていた・・・不覚にもガキに跳び蹴りを喰らったのだ。すぐ追いかけようとしたが、ガキはすぐ傍で倒れていた。

「おっ、おい！」

ガキの方に駆け寄って抱き上げるとヒュー・・・ヒューと荒い息遣い

をさせ、顔色は蒼くなっていた。

「美岬ちゃんっ」

看護婦がガキに薬を飲ませると、荒かった息遣いは治まった。そして駆けつけた医師によってガキは部屋に運ばれて行った。

・それが美岬との出会いだった・

“かわいそう”の集まり

「相田君、今日は患者の人々と話してみようか。」

サナトリウムでボランティアを始めた翌日、掃除をしていた俺の元に加賀はやってきてそう言った。

“まだ掃除している方がマシ・・”しかしそんな事も言えず、患者の人間共と顔合わせをすることになった。

たくさんの人間の中には、昨日俺の事をずっと見ていたババアもいた。今日もまたじーっと俺を見ている・・。

“言いたいことあったらさっさと言えや!”・・とも言えないし・・。ただひたすら無視するだけだった。

加賀のすすめで仕方なく一人一人と話をしている時、近くにいた看護婦が

「ねえ、美岬ちゃんは？」

と、ボソボソ話していた。

美岬という昨日のガキか・・。

そういえば、ここにはいないな。

昨日の行動からみると、とても患者とは程遠い暴れ馬・・。

あのガキ、女のクセにこの俺に向かって蹴りいれやがった。

俺に蹴りを入れやがったのはあのガキが初めてだ・・。

「・・女のくせに・・」そうするとだんだんと・・

「美岬ってガキの部屋はどこだーっ」

と、怒りがこみ上げてきた。周りにいたジジ、ババが目をきよんとさせていた。

看護婦に問い詰めて（半分脅して）そのまま三階の奥の病棟に突っ走って行き、“葉山美岬”とネームプレートに書かれた部屋を確

認すると、ドアを乱暴に開け、

「こらっ、このクソガキ！昨日はよくもこの俺に蹴り入れてくれたなー」

そう叫ぶと、ベッドから降りて窓辺にいたガキがこっちを見た。

その顔色は、昨日の蒼い顔に似てとてもいいとは言えなかったが、ガキはこっちを睨むと

「さっさと出て行けヤンキー！」

と、つぶやいた。

な・何なんだこの人間は。

俺は何も言わずに、また乱暴にドアを閉めるとすぐ加賀の元に行き、ただ一言言ってやった。

「やめる」

その言葉に加賀はただ、プツッと吹き出すだけだった。

こんな所に俺もムカムカしてきた。

よくよく考えてもみると俺は、三田によって無理やりここに連れてこられた訳で、好きでいるわけではない。

さっさと自分のアパートに帰って遊びまくるんだ。しかし・

「ダメだよ。」

加賀は一言そう言うのと部屋を出て行った。

さっすが三田の親友というだけあって、性格もよく似ていやがる。

ここから出られないのなら、サボってやる。

一階のフロアで掃除をほったらかして煙草を吸っていると、庭で患者であるクソガキ共が看護婦に見守られながらボールで遊んでいた。ここにいる奴等は一人では何も出来ない、誰かが支えてやらないとどうすることも出来ない“かわいそう”なのだ。

ここにいる医師や看護婦はそいつ等に同情しているんだ。

・・くだらねえ。

もし、俺が患者なら同情した奴を片っ端からブン殴ってやる。だから、俺はここにいる奴等が辛くても、絶対同情しないしなぐさめたりしない・・。

そう色々考えてるうちに、だんだんと自分が惨めになってきた。どうしてこんな事を考えているのかと。

「チッ。」

舌打ちすると俺は煙草を灰皿に捨て、モップを持って掃除を始めた。だけど、俺はこんな所でぬくぬくと奴等と関わって暮らしたりはしない、さっさとやめてやる。

ぶつぶつ言っていると、いつの間にか横にはあの、例のババアがいた。

・・またかい・・。

ずっとこつちを眺めては少し微笑んでいた。

このババアは一体何なんだ？俺に何を言いたいんだ？すると後ろから、ババアを呼ぶ看護婦の声がした。

「佐山のおばあちゃん、またここにいたのね。」

ババアは一旦看護婦の方を見たが、すぐ俺の方を見てはシワだらけの顔をほころばせていた。

すると突然、ババアが俺の手を握ってニコニコ笑っていた。

何なんだ一体・・。

このババアは俺に何を求めているんだ？俺はただ、気味が悪いと思いつつもババアのされるがままであった。

「ほらほら おばあちゃん、もうお部屋に帰りましょうね。」

看護婦はそう言ってババアを連れて行った。

俺はやっとババアから解放され、ホッとした。

「あの人はね 入院してもう半年が経つかな・佐山スズヨさんていうおばあちゃんなんだ。」

後ろから突然、加賀が声をかけてきた。

「あのババア どっか悪いの？」

「ん、末期の癌でねもう永くないんだ。さらにボケてきちゃってね・時々僕たちの事も忘れてしまうこともあるんだ。」

末期癌かよく聞く病名だな。

「あのババア、よく俺の事を見てるんだよ。さっきなんか手を握りやがった。」

すると、加賀も俺の方をジッと見てきやがった。

何なんだこいつは……。すると加賀は何かを思い出したかのような表情で、

「そういえば似てるね〜佐山のおばあちゃんとこのお孫さんに。似てる似てる。そのお孫さんも君と同じ元暴走族だったんだよ」

「ババアの孫？ “元” って事は今年少の中にいるわけ？それとも引退したとか？」

「いや・亡くなったんだよ。事故で。」

加賀の話によると、ババアの孫有也は両親の不仲から暴走族に入り、両親に反発するようになったが、ババアには変わらなくとても懐いており、唯一心を開いていたという。

ババアもまた、そんな不憫な有也をかわいがっていたそうだ。

しかし、数日後有也は近所のクソガキが車に轢かれそうになった所を助けたが、代わりに有也が轢かれてしまった。

ガキは軽傷で済んだが、有也は即死だった。

かわいがっていた孫だっただけにショックも大きかったという。
それからババアの体調は悪化し、ボケてしまったそうだ。

生前よく見舞いに来ていたその有也と俺が似ているそうだ。

「ふ・・ん。なるほどね。」

何かを思いつくと俺は再び掃除を始めた。

・・面白くなってきたかもしれない・・。

計画実行

それから俺は“とりあえず大人しく”ボランティアをしていた。ババアに声をかけられたら相手もするようになったし、その時は“相田真夜”ではなく“佐山有也”として相手をするようにした。看護婦に聞いていた通り、別れる時には“有也”の口癖だった

「長生きしろよ」

も言うようになった。

“同情するのは嫌い”それはもちろん今でも変わりはない。

俺がこうしてババアにしていることは、同情ではない・・・。

優しさなんかでもない・・・。

これは、俺の“計画”なんだ。

そう・・・ここでの退屈な生活を楽しめるように、俺が立てた計画・・・。これはまだ始まりに過ぎないんだ。

しかし、いくら計画とはいえ・・・ババアに優しく接している俺を

三田のバカが見たら、さすがに驚くだろうな・・・。

俺の前にも何人か少年院を出た奴等がここでボランティアをしていたが、その中でも俺が一番まともらしい。

周りにいるジジイやババアが口に使っていた。しかし、俺はその度に頭にきて、つい

「俺がまともだったら少年院なんかに入ってねえよっ。俺もそいつらと同じなんだ、わかった口きいてんじゃねえよ！」

そう怒鳴り散らしていた。

“まとも”と言われた事がバカにされているようでとても気分が悪く、腹立たしかった。

所詮俺たちは暴走族で要領も悪いし、真面目ではない。

ここにいることですら、おかしいのかもしれない。ガキはガキで、

“少年院って何？”

“お兄ちゃんは不良さんなの？”

としか言ってこねえ……。そいつらに対しては俺は笑って、

「ガキは小便して寝てりゃいいんだよ。」
と、言っていた。

「クソッ！」

一階フロアにある椅子に座り、煙草を吸った。

この時間が一番落ち着く……。

いつの間にか2本・・3本と吸っていたその時、三田がやってきて俺の隣に座った。

「なっ、どうしてここにいるんだよ。」

「一応僕は君の保護官でね、3日に一回位は君に会いに来ないと。そういうばそうだった。こいつはいわゆる俺のお守り役だ。」

それにしてもコイツは本当に変わった奴だ。

わざわざ年少を出た奴にボランティアを紹介するなんて……。

そこまで世話をする奴なんて聞いた事がねえぞ。

・・まあ俺は1回しか年少に入ったことないし、他はどうかはよくわかんねえけど……。

とにかく、こんなお人好しは初めてだった。

「相変わらず、孤独と共にしているの？」

これは三田の俺に対する口癖だった。

「へっ大きなお世話だよ。孤独で結構、大いに結構！正直言っておこはイライラする。“手と手を取り合ってお互いに助け合おうね。”だってよ。やってられねえよ、こんな所。一人でいたい時にガキ

共が集まってくる・・・“オニイチャンハ、フリヨウダツタノ？”見りゃわかるだろう・・・バカバカしい。」

「けど、君は佐山のお婆あちゃんを、亡くなったお孫さんになりきる事で救っているじゃないか」

三田の一言に一瞬間を置いて、うつすら笑いを浮かべて

「そう・・・救った・・・だが救ったのはババアじゃない、俺は俺自身を救ったんだ。」

サナトリウムという名の牢獄で息苦しかった俺が考え付いた計画。俺はここにいる人間・・・いや世界中の人間が憎かった。

利用出来るものは、利用する。

俺を信用する奴はとことん信用させて、最後に裏切りという爆弾を一つ落としてやる・・・俺はその時の相手の顔が見たいんだ。

三田もそうだ、利用してやる。加賀も・・・

「一つ言っておくよ」

三田はそう言って立ち上がった。三田の表情は穏やかだった。

「真夜、君は結局孤独に勝つんだよ。」

そう、言い放つとサナトリウムを出て行った。勝手な事ばかり言いやがって・・・

何も知らないくせに・・・ここまでお人好しだと腹が立つ。

三田が帰ってからしばらくの間、煙草を吸う事で自分のイライラを抑えていた。

「俺はここに来て何を求めているのだろう・・・」

「有也・・・」

振り返ると、そこにはババアがいた。その手にはたくさんの饅頭があった。

「何だよ、ばあちゃん部屋行つて寝てろよ」

けれど、ババアはそんな俺の言う事も聞かず横に座ってきた。そして手に持っていた饅頭をテーブルに置き、その中の一つを取り包み紙をとって俺に差し出した。

「ほれ、有也。お前この饅頭が好きだったろ・・・お食べ。」

う・・・俺は饅頭が大嫌いなんだよ。

餡子が甘くてどうしてもすきになれねえのに、“食べ”と言われても・・・。

しかし、ずっとババアはそれを持っていた。

手が震えていてしまいいには饅頭を落としてしまった。

“ああこれは食えねえな”と一瞬ホツとした時だった。ババアは落ちた饅頭を拾って、

「ああ、落ちてしまったね。これはばあちゃんが食べるから、有也はこっちの新しいのを食べな」

そう言つてババアは落ちた饅頭を口に入れようとした・・・クソッ！俺はババアからその饅頭を取り上げて自分の口に押し込んだ。

「有也？」

突然の事にババアはキョトンとしていた。

そんなババアに俺はもう一つ饅頭を包み紙から出して、ババアに渡した。

「ばあちゃんはこっちの饅頭を食いな」

ババアは饅頭を受け取り、嬉しそうにちぎって食っていた。

ババアは饅頭を食うと、残りの饅頭を俺に渡して自分の部屋に帰っていった。

ババアの幸せそうな顔を見ると、本当にイライラしてくる・・・幸

せを早くぶち壊したくなる。

テメエの好きな“有也”はとつくに天国にいるんだとぶちまけたい・。

計画とはいえ、ババアに優しく接している俺に対しても嫌気がさしてくる。こんな自分をもっとイライラする・・・。

俺はババアから受け取った饅頭を焼却炉に捨てた。

変なオンナ

あれから部屋にこもって、いつの間にか眠ってしまっていた。

目が覚めると、時計の針は夜の11時を示していた。

ものすごく退屈だったので、屋上に行って一服していると後ろの方から声がした。

「誰かいるの？」

振り返るとあのガキ、“葉山美岬”が俺の方をじっと見てつつ立っていた。

「な、なんだお前 もう寝る時間じゃ」

「別にいいじゃん、眠れないんだから」

ガキはそう言うのと、星空を眺めていた。その目はなんとなく寂しうだった。

「たばこ・・・」

俺の煙草の煙に気がついたのか、ガキはつぶやいてこっちを見た。なんだ・・・吸うのをやめろってか？

「たばこって、吸っている人間より、周りにいる人間の方に害が及ぶんだよ」

ガキはそう言って俺の口からたばこを取り上げると、地面に捨て踏みつぶした。

何...をしているんだコイツ。

自分が何をやったかわかっているのか？こんな病気持ちがこの俺からたばこを取り上げるなんて...

「ぶっ殺す！今すぐ死ねっ」
そう言い放ちジロツと睨んだが、ガキはその場に座り込むと一度溜め息をついた。

「あなたにとつてはおいしいたばこかも知れないけど、ここには肺を悪くしている子もいるの。その子達にとつたらあなたのたばこは毒なの：それくらいわかるでしょ？」
と、言うともた空を眺めていた。

確かにコイツの言っている事は正しい…。
だったらフロアにも灰皿を置くなよ…。あれは
「どうぞここで吸って下さい」
って言っているようなものだ…。あそこにも何人か患者はいるし。

「ああ：俺も気をつけるよ」

「ん、あんたが気をつけても一緒だけどね」
く…口の減らないクソガキだな、オイ！しばき倒してやろうか…この（一応）女。

そう思っていると、突然俺の前に現れて、目をじゅっと見てくると、
「そういえばあなた名前は？」
そう言って、また目を見てきた。

「人に名前を聞く時は、先に自分の名前を言うのが礼儀ってもんデシヨ、おじょーちゃん？」
そしてガキの額を突いた。ガキはムツとしながら

「葉山美岬：18歳」
：18？コイツ18歳か？俺よりたった2つ下…。15、16くらいと思っていたのに。

「ああ：18歳か。俺は相田真夜、20歳」
するとコイツもキョトンとしていた。

まさかコイツも同じ事を考えていたのか…。そう思うと腹が立つ。

「ねえ？周りの人から聞いたんだけど：少年院入ってたってマジ？」
でた…。コイツも他の奴等と同じか。ったくどいつもこいつも、
モノ珍しそうに聞きやがって。

「ああ、マジマジ！おじょーちゃんの年齢の時から入って、ついこの間出て来たの。ナイフで違う族のメンバー切りつけて、入ったの！わかりました？」

もう、うっとおしくらいこのセリフをいろんな奴に言った。そしてその反応は“ひく”奴もいれば、

「そして、そして？」

とさらに聞きたがる奴もいる。

さて：コイツはどうだろう…とガキの方を向くと、ガキはじゅっとしたまま突っ立っていた。

「そう：切られた人痛かっただろうな…」

そう言うのと、うつむいた。

「まっ俺が切られた訳じゃないから、痛いかどうかはわかんねえな」
俺はしゃべりながら、こんな反応初めてだと思った。

ガキはうつむいていた顔を上げると、こっちをジッと見ていた。なんか気味の悪い女だな…。

「じゃあ、俺行くわ。お前もさっさと寝ろよ」

そう言って立ち上がり、ドアの方に行こうとした時ガキは

「ねえ、あなたって優しい人？それとも冷たい人？」
と問い掛けてきた。俺は振り返り、ガキを睨み付けると

「冷たい人に決まってんだろ。優しかったら患者のオメーをそこに置いて行かないよ」
そう言い放つと、再びドアの方へ行き階段を降りていった。

「変なオンナ…」

“あなたって優しい人？”

そんな事聞かれたの初めてだ。
今までのいろんな女と付き合ったりしていたが、こんな事聞く奴はいなかった。

だから實際目の前でそう言われた時、一瞬どう答えればいいのかわからなかった。

それでつい、あんな風に答えてしまった。

でも本当に俺は冷たい人間だ…。

俺の周りにいる奴、三田も加賀もババアもすべていなくなればいいと思った。優しい奴はこんな事考えもしない。

「はぁ…」

溜め息ばかりが出てきた。

そしてイライラも募ってきた。

できるだけ葉山美岬にも会いたくないという気持ちでいっぱいだった。

あのガキと会うと、何だか俺が俺で無くなる気がしていたからだ。

自販機でコーヒーを買い、部屋に戻った。

コーヒーを飲んだせいか、その日は眠れなかった…。

眠れなかったが俺はベッドに潜り込み、その中で髪をぐしゃぐしゃにかきまわった。

その心の中はすべての“雑音”を消したい気持ちでいっぱいだった。
—こんなの俺じゃない—

ムカつくオンナ

翌日、俺はやるべき仕事もせずずっと部屋にいた。昨日の事でイライラが続き、仕事をしてる場合じゃなかった。そんな俺の様子を加賀が見に来た。

「どうしたんだい？時間過ぎても来ないから、見に来ただけだ。」

壁の方を見て寝ていた俺に、加賀は何かと声を掛けてきたが俺はずっと無視していた。しかし、加賀も負けじと声を掛けてくる・・・。

「佐山のおばあちゃんも“有也クン”をずっと探しているんだけど。」

そんな事、俺の知ったことじゃない・・・

「いいの？おばあちゃんに会わなくて。」

しつこい・・・。何も言わず寝ていると、観念したのか加賀はやっと部屋を出て行った。ドアの向こうで、ガキ共の

「お兄ちゃんどうしたの？」

という声が聞こえる。加賀は、

「お兄ちゃん今日は具合が悪くてお休みしているの」

そう答えていた。おせっかいな奴・・・本当に苛立たしい。他人におせっかいをやける程、余裕を見せる奴が俺にとっては腹立たしい・・・。

ふと枕元を見ると、昨日屋上から帰ってきた時に置いた煙草があった。それに手をやると、1本・・・2，3本吸い始めた。

“あなたの煙草は、毒になる・・・”

昨日の葉山美岬の言葉はもちろん忘れてはいなかった。しかし、今の俺にはそんな事どうでもよかった。むしろ、この毒を世界中に撒き散らしたかった・・・。

しばらくして、ドアを少し開けてみたが廊下には人の気配がなか

った。そっか・今は昼すぎだからみんな部屋で休んでいるか。そしてもう一度誰もいないのを確認すると、ジャケットを持ち出し、屋上へと向かった。途中、誰かと会わないか気にしながら・・・。

屋上の重い扉を開けると、まぶしい陽射しが俺の顔を照らした。手で陽射しをさえぎり前を見ると、そこにはあの“葉山美岬”がいた。ドアが開いた音で、奴もこっちに気がついていていた。しばらく、2人とも目を合わせたまま何も言わず止まっていたが、やがて俺の方が先にニコツと笑い目を反らすと、来た方を振り返り、

「失礼しました」

と、扉を閉めようとしたが、

「暖かいよ！こっち来なよ。」

と、いう声がしたのでもう一度扉を開け、ガキの方に足を進めた。葉山美岬はパジャマ姿でフェンスにもたれかかっていた。俺もフェンスにもたれると、1回ため息をついた。はいた息は11月だったというせいもあって、ほんのり白く見えた。

「今日は具合が悪くて、寝てたんじゃないの？」

・・・どこまで知れ渡ってんだよ・・・。

「ああ、具合が悪かった。けどもういいんだよ。お前は？部屋で寝てなくていいのかよ」

そう聞くと、ガキはただ頷くだけであった。

“口があるなら、しゃべれや！おいっ。”

口に出そうとしたが、留めておいた。少し沈黙が続いたが、やがてガキが何度かくしゃみを始めた。そりゃ少し暖かいとはいえ、11月の寒空の中パジャマでいたらくしゃみもするわな。ガキは少しずつ俺から遠ざかり、くしゃみ、またくしゃみと繰り返していた。

俺から遠ざかったのは、それなりに気を遣っていたのか・・・。それなら、さっさと部屋に戻ってくれたらいいのに。しかしそんな思いとはうらはらに、俺は持っていたジャケットをガキの背中に羽織った。ガキは驚いた顔で俺の方を振り返ると、

「ありがとう・・・」

と、小さくつぶやいた。そして俺の方をジッと見ていた。何でここにいる奴は俺のことをジッと見るのかねえ……。ババアといい、このガキといい……。

「たばこ、吸わないんだ。」

ああ、そういう事か。それで俺の方ジッと見ていた訳ね。

「吸っているよ、自分の部屋で。さっきも1箱吸ってきた。悪い人デシヨ？」

そう言うと、ここで吸おうと思っていたタバコを、ポケットから出してガキに見せた。俺はこいつが怒ると思っていたが、ガキは怒るところか少し笑って、

「うん、そう思った、吸っているんじゃないかって。ホントに悪い奴だねえ」

と、言った。その時、俺はこのガキに対して少しだったが苛立ちを覚えた。

“ウソついてんじゃねえよ”

“思ってる事言えよ”

“ホントは俺の事責めたいんだろ”

など色々頭に浮かんでいた。それをすべてガキにぶつけてやりたい気持ちだった。

「ホント、悪い奴。テメーの親泣いているんじゃないのかっての。」

俺はずっと黙っていても、ガキはしゃべり続けた。それがとてもウザかった。

「少年院出たばかりなんでしょ？お父さんとお母さんここにいるって知ってるの？」
うるさい……。

「せっかくおりこうさんになったんだから、たばこなんて吸っちゃだめだよ。」

ウルサイ…。

「友達はないの？」

う・る・さ・い・だ・ま・れ

「どんな人？あなたと同じように不良さんが…」

ガシャンッ

ガキが言うのを最後まで聞かずに、俺はガキがもたれていたフェンスに拳をぶつけていた。ガキはただ驚くだけで、また俺の方を見ていた。そんなガキに俺は鋭く睨み付けると、

「何も知らないくせに…」

そう言い放ち、その場を走り去った。ガキにジャケットを渡したまま…。

部屋に戻りドアを閉めると、そのままベッドに飛び込んだ。

「何も知らないくせに勝手なこと言うなよっ」

再びつぶやいた…。そして起き上がると、そばにあった灰皿を掴み鏡に向かって投げつけた。割れた鏡に映る俺の顔は惨めな“相田真夜”だった。

屋上になんか行かなければよかった…。いや、それよりも人と馴れ合うこと自体間違ってたんだ。

“何も知らないくせに…”

別に知ってもらおうとも思わない…。知られてたまるか。俺は決して自分の気持ちを外に吐き出したりしない。少しでも表に出してみろ…。返ってくる言葉は、

「わあっ大変だったんだね」

「大丈夫？色々大変でしょう？可愛いそう」

こんなものだ。同情なんかされたくない、惨めになるだけだ。だから決して表に出さない…。そう決めたんだ。“あの時”から…。

「サイアク…」

そう呟くと投げつけた灰皿を再び掴み、残ったかけらでまだ自分の姿を映してやがる鏡を粉々に砕いた。

一 惨めな姿をした俺を消し去りたかった！

ムカつくオンナ（後書き）

こんにちは。初めまして。山口維音です。＜b r＞“君が僕にくれたもの”を読んで頂きありがとうございます！初めての小説なので、読みにくい点もあるかと思いますが、頑張りますのでよろしく願います！感想等たくさんお待ちしています。

惨めにさせる場所

あれから、何時間が過ぎたのだろうか……。ふと外を見ると空は暗くなっていた。ドアを開けると、廊下はシ・・ンと静まりかえっている。この時間帯は、夕飯の時間か……。本来なら俺も食堂で食べるのだが、あのガキと顔を合わせるのは想像しただけでも吐き気がする。

近くに売店があるので、俺は静かに部屋を出て売店へと向かった。誰もいない廊下は静かに歩こうとしてもよく響いた。角を曲がると売店だ・・ついでに煙草も買っておこうか……。そう思いながら角を曲がったその時だった。

「ババちゃんっ」

そう叫ぶと、売店の向こうで倒れているババアの方へ駆け寄った。近づいてみるとババアは体を抑え、ただ

「痛い、痛い」

と呟いていた。何が何だかわからない俺はババアをそのままにして、売店に向かうと何事かと見ていた売店のババアに

「そこにある内線で、内科の藤谷のオッサンに連絡してくれ。佐山のババアが倒れたと言ってくれたらわかるから。」

そう言うと、再びババアの元へ駆け寄った。

「有也・・有也？」

ババアはそう呟きながら俺の方に手を差し伸べていた。その手を、俺はしっかりと握り締めた。

しばらくして、藤谷のオッサンが看護婦と共に走ってきた。そしてババアのそばに近づくと、

「佐山さーん、大丈夫ですか？どの辺が痛いのかなー」

そう耳元で大きな声を出して話しかけていた。ババアはそれに答えるよう、下腹部の方を指していた。藤谷のオッサンはそれを確認す

ると、看護婦にババアを治療室に連れて行くよう指示を出した。そして俺の方を見ると、

「ありがとう。君が発見してくれたおかげでおばあちゃん助かるよ」

そう言った。俺はすぐ立ち上がると、一度オッサンに向かって睨みつけたがすぐに笑みを浮かべた。オッサンがそれに応えるようニコツと笑ったのを確認すると、俺はその場から立ち去ろうとした。そして、オッサンとすれ違う時に一言呟いた。

「その方が後からくたばる時、ダメージが強くていいだろ？」
「なっっ」

藤谷のオッサンは俺の方を向いた。俺はそれに対して、笑顔で返すと自分の部屋へと戻った。

電気もつけずにベッドへ倒れこむと、さっきの藤谷のオッサンの驚いた表情が頭に浮かんできた。

「くっ、くくく・あっはっはっはっ あゝっはっはっはっ！」
ただ笑うだけだった。ホントにおかしい・。俺が本気になって人を助けるかっての！

神サマじゃねえんだよ、オ・レ・は！おかしくて、おかしくて・

・・・涙が出てくる・・・

今回の事で、もう加賀達も俺の事に嫌気がさすだろうな・。それでいいんだ・。そしてさっさと俺を追い出してくれ。もともと俺にはこんな場所、似合わなかったんだ。こんな場所にいたら俺は腐ってしまう。・。それなのに、

「いやあ、藤谷先生から聞いたよ！昨日佐山のおばあちゃんを助けたんだってね。君もやるじゃないか」

翌日の加賀の第一声がこれだった・。その言葉に思わず倒れそうになった・。こいつら、やっぱりおかしすぎる。普通なら追い出すぞ！今すぐにでも出て行きたいのに・。

ため息をつき、頭を押さえながら廊下を歩いていると、三田が立っていた。どうして、こう次から次へと出てくるのか……。三田は下の方を指して、

「テラスにでも行こうか」

と、声を掛けた。それに対し、俺は1回頭をかきむしるとため息をつきしぶ三田について行った。

三田はコーヒーを買うと、先に座っていた俺の前にコーヒーを差し出した。それを受け取ろうとしたが、三田はそれをかわす様に上へコーヒーを上げた。俺をからかっているのか……。俺は三田をギロツと睨みつけたが、三田はそんな俺に対してニコツと笑うと、

「人から物をもらう時は“ありがとう”デショ？」

そう言った。それに対し、思わず口を大きく開けたまま啞然としてしまった……。別に、目の前にあるコーヒーを欲しい訳じゃないからそのまま無視してもいいが、それだと何か俺が“負けている”感じがして嫌だった。だから俺は眉間にシワを寄せながらニツコリ笑うと、

「ド・ウ・モ・ア・リ・ガ・ト・ウ」

そう言うと、三田は満足したらしくすぐにコーヒーを渡し、そして話し始めた。

「どう？ここにはもう慣れたんじゃない？」

「こんな所慣れてたまるか！俺はさっさと帰りたいんだよ。そしてまた悪さでもして、年少の世話にでもなろうかな……」

そう言い放ったが、三田は何も言わなかった。一体何を考えているのか、俺にはさっぱりわからなかった。しばらくの間、俺も三田もずっと黙っていた。沈黙が時を駆け巡っていた……。居心地が悪くなってきたが、三田がやっと重い口を開き始めた。

「前に言ったと思うけど、結局君はここで暮らしていくんだ。君はまだまだ自分の“殻”に閉じこもって、孤独から抜けられないんだ。だから今の君は早く帰りたいなんて言っているが、それもいつまで続くか……」

ヤメロ・・・

「いいかい？ 僕がここに君を連れてきたのは、君を変えたかったからだ。それをずっと覚えたい欲しい。実際、今の君はほんの少しずつだが、僕らが出会った頃とは違うんだ。君は・・・」

「うるせえっ！」

三田が言いかけたのを、俺はテーブルを叩きつける事でさえぎった。説教なんてまっぴらごめんだ・・・。

「うるせえっ、うるせえっ！ もう何も言うな！ お前や加賀にはうるざりだ！」

そう言った後、すぐに頭を押さえた。三田はそんな俺を見ると、1度ため息をつき話し始めた。

「わかった。じゃあ話を変えよう。真砂さんが帰って来るそうだよ」

「え・・・？」

・・・真砂が・・・帰って来る・・・

愛しい真砂

三沢真砂・・彼女はかつて俺と付き合っていた女で、俺が2番目に心を許した人間だった。付き合っていた頃も、もちろん俺は不良だったが、真砂の家族は俺の事を本当の家族のように暖かく接してくれ、本当に落ち着く事ができた。俺は真砂を愛したし、真砂もまた俺の事を愛してくれた。俺は悔しい時はいつも真砂に支えてもらい、泣きたい時は泣いた。本当に幸せだった・・けど、幸せは長く続かなかった・・。

真砂は転落事故で歩けない体になってしまった。俺は変わらず愛し、今度は俺が真砂を支えた。真砂の事も考えて、歩けなくなったからといって、過剰に接する事はしなかったし、特別扱いをする事もなかった。そんな俺に真砂もホッとしていた。

時にはケンカする事もあった。歩けなくなった真砂の気持ちをちゃんとわかってやれない俺、俺の真砂に出来る事をしてやりたいという気持ちがわからなかった真砂。しかし、それでも2人で一生懸命支えあってきた。普通の恋人同士に変わりはないかった・・俺はそんな生活でもよかったんだ。

しかし・・真砂は耐える事が出来なかったんだ。俺に告げられたのは突然の別れだった。真砂は俺に対して笑顔を見せつつも、ずっと遠慮していたのだ。それに気付けなかった俺は、ただ悔しくて・・俺は真砂には言っていなかったが、このまま族を抜けてまともな職について、安定したら真砂と結婚しようと思っていたんだ。

それから俺はさらに荒れ狂うようになった・・。もう誰も支えない・・必要としないって。しかし、どんなに荒れていても心の中の寂しさは癒されなかった。真砂はそれだけ俺にとって大きな存在だったんだ。

それから何ヶ月か過ぎた頃、俺の元に真砂の父親からエアメールが届いた。手紙には、真砂は歩けなくなった足を治す為、アメリカ

に行った・・・と書かれていた。それを黙って俺の元から去って行った真砂・・・俺にはショックが大きかった。

その真砂が帰ってくる。三田には俺が年少に入っている間、万が一真砂から連絡が来たら・・・と前々から話をしていたが、待ちに待った連絡がやってきた。帰ってくると言う事は、真砂は歩ける様になったのか・・・それとも・・・

ずっと荒れていた俺の心に何かホッとした気持ちが流れ込んできた。嬉しかった。あの時あんな別れ方をして、俺は素直に喜べた。

「そっか・・・真砂帰ってくるのか。すっげえ綺麗になっているんだろうな・・・」

そう言うと、目を細めて笑った。こんな落ち着いた気持ちになったのは久しぶりだった。真砂の存在は“不思議”だった。何が“不思議”なのかはよくわからないが、とにかく“不思議”だった。

「それで？いつ帰ってくるんだ？」

「・・・それがわからないんだよね・・・」

俺の問いに三田はあっさりと答えた。その態度にムカツときた俺はその場を去ろうとしたが、三田はあわてて、

「真砂さんがね、君を驚かせたいんだって！だから日付書いてなかったんだよ」

と、言って俺を引き止めた。俺を驚かせたい・・・か、真砂らしいや。そう思うとまた笑ってしまった。

「いつ帰ってくるのか楽しみだ・・・」

そう呟くと残りのコーヒーを飲み、再び立ち上がった。

「どうしたんだい？また部屋に戻るのかい？」

「いや、今日は気分がいいから仕事して来る。」

そっくり残すと、その場を去って行った。そして倉庫からモップを取り出すと、廊下を磨き始めた。真砂のおかげで今日は気分良く仕事が出来そうな気がした。

“真砂が帰ってくる・・・”

嬉しい気持ちでいっぱいだったが、こんな惨めな姿を見られたくない・・・という不安も拭いきれなかった。

手に入れた自由

何時間か過ぎて、やっと仕事が終わったので部屋に戻ることにした。相変わらず飯は一人で食っていたが、今夜は真砂のおかげで気分がよかった。飯を食った後、俺は真砂のことをずっと考えていた。どんな女性になっているのか……。もしかしたら、あっちで彼氏が出来ているのかもしれない……。それでもいい……。ただ会いたい。そして1回でいいからもう一度真砂と歩きたい。一緒に出掛け……。ん？　ん？　あっ！

「三田のヤロウ……！」

ある事に気がついた俺は、すぐに部屋を飛び出して加賀の元へ急いだ。そして乱暴にドアを開けると、加賀は今の俺の状況とは逆で、のん気にコーヒーを飲みながら書類に目を通していた。

「おや、どうしたんだい？」

「オッサン、今すぐ三田にここへ来るよう伝えろっ。今すぐだ！」

「一体、何事だね？」

「いい……から、早くしてくれ！」

加賀のオッサンは、俺の言うとおりにすぐに三田を呼び寄せた。俺は応接用の椅子にドカッと座り、一回ため息をついた。

“ 何で今まで気がつかなかったんだ……。 ”

自分の情けなさに呆れながら、髪をグシャグシャとかきむしりながら三田がここに来るのを待っていた。加賀のオッサンは俺にコーヒーを差し出すと、向かいに自分も座った。

三田を待つうちに苛立ちが募ってきた。すると、廊下からパタパタという音が響いた。来たな……。。

「真夜！何かあったのか？」

ドアを開けるなり、三田はすぐにそう言いながら俺の前までつかつかとやって来た。

「何か・あつたのかじゃねえだろ！俺はお前によって保護監察の身だが、別に外へ出たらダメだと言う訳じゃねえよな？」
と、問い詰めると

「ん、まあそういう事になるね……。君は本来ならある意味自由の身だし。」

三田は首を傾けながら答えた。それを聞いた俺は大きくため息をつき、下をうつむいた。

「そういう大事な事はさっさと言えや……。」

てか、気がつかなかった俺も俺だが……。

「そしたら、俺は別にどこへ行ってもいいんだな。」
念の為、もう一度問いかけると三田は少し頷きながら、

「そういう事になるねえ……。」

と答えた。俺はすぐに加賀の部屋を出ようとしたが、すぐに三田に呼び止められた。

「真夜、どうする気なんだ？一体どこへ行くんかい？」

俺はゆっくりと三田の方を振り返ると、少し目を細めて

「“友達”の所だよ」

と答えると、再びドアの方へ向かい部屋を出て、廊下を走っていった。そして、自分の部屋へ戻りジャケットとキーを持ち出すと、サナトリウムを出て近くに止まっていたタクシーに乗り、目的地へと向かった。

— やっと俺が俺らしくいられる場所に帰れる……。 —

俺のいるべき場所

アパートに戻った俺は、單車に乗り換えると“目的地”へと向かっていった。

しばらくして目的地に着くと、單車から降り目の前にある店を前にして、ただ懐かしい気持ちでいっぱいだった。そしてドアを開けると、中では大音量の曲が流れ、俺と同じ年代の人間共がたむろっていた。ここは、酒・煙草・女・何でもOKと最悪極まりないヤロー共のタマリ場・そう、ここは俺がいた族のタマリ場で“DEAD ANGEL”という店だった。

俺は階段の上から大きく手を叩くと、それまで騒いでいた奴等が一斉にこっちを見てきた。一瞬シ・ンとしたが、

「真夜じゃねえかよっ！おい」

「やっだー真夜じゃない！」

「いつ出て来たんだよ！」

と、いった声が聞こえてきた。俺は手を上げると、

「久しぶりだな！」

そう言いながら、階段を下りていった。すれ違う1人1人に声を掛けながらカウンターへと向かっていった。カウンターにはバーテンのカイと俺のダチのケイゴがいた。

「よおっ、久しぶりだな！元気にしてたかよ」

と、声を掛けると、

「ああ、オメーも変わってねえな。」

ケイゴがそう言う俺の肩を、強く叩いてきた。ああ・・やっぱり俺にはこっちの方が落ち着くかも・・。周りにいる奴等も同じような人間だし、あのイライラもない。どれだけ加賀や三田が俺の事を変えようとしても、所詮俺は“こっち”向きなんだ。そう今改めて実感した。

「2年経つのにまだこの店あったのかよ」

「そうなんだよ、よく続いているだろ？」

俺とケイゴの会話を聞いていたカイが、俺たちの顔にタオルを投げつけた。

2年前俺はここでは、いわゆる“王様”だった。どいつもこいつも俺の言う事を聞いていた。どうやらそれは今でも変わらないらしい……。実際、俺が2年前まで座っていた俺専用のシートも誰も座ることなく、今日を迎えていた。俺はカイから酒を手に入れると、ソファにドカッと座り酒を飲み始めた。

そんな俺の元に、昔からの常連で同じ族のメンバーであるカオルがやってきて、隣に座ってくると、俺の肩に手を置き

「真夜〳2年も寂しかったぞ。ホント久しぶり〳」

と、耳元にささやいてきた。

「そうそう、お前が年少にいる間カオルずっと愚痴ってたんだぜ？」

ケイゴの言葉に、カオルはうっせえと叫んでいた。だが、カオルはもちろん彼女でも何でもなかった。俺はただの店の常連で、同じ族のメンバーと思っていたが、ケイゴの話によるとどうやらカオルの方は違っていたようだ。2年……。いやもっと前からカオルは俺の事が好きだったらしい。だが、俺にはもちろん真砂がいたし……。カオルがこうして近づいてくるのは、真砂が傍にいないから出来ることだった。

カオルは相変わらず、俺に寄り添っていた……。俺は1度上を見上げると、カオルの肩に手を回し俺の方に寄せるとカオルにキスをした。それを見ていた周りのやつらからは、冷やかす声とカオルへの野次が聞こえてきた。そして1人顔を赤らめているカオルの耳元に

「もうすぐしたら、真砂が帰ってくるんだ。」

と、囁いた。それを聞いたカオルは、また別の意味で顔を赤くして俺の顔を見ると、

「なんだって……。あの女が？」

そう言うカオルの手は震えていた……。カオルが真砂の事を邪魔に

思っていたのは知っていた。

「真夜・まさかあんた、あの女とよりを戻そうとしていないよね？」

と、少し落ち着いた感じで聞いてきた。俺はただ黙って煙草を吸い微笑んでいた。

「ケイゴォ！真夜を何とかしてよ！あの女は合わないよ」

と、カオルはケイゴに叫んでいた。しかしケイゴもまた、ただ笑っているだけだった。俺は煙草の煙をカオルに吹きかけると、

「カオル？どんなに待っても俺はお前にはなびかねえよ。一生・・」

それを聞くと、周りにいた女共がクスクスと笑い始めた。カオルはさっきよりも顔を赤らめると、何度も俺の胸元を殴っていた。そんなカオルを無視して、腕時計を見るときもう3時を過ぎていた。ヤベッもうそろそろ戻らないと、三田や加賀がうるさいからな・・。

「ケイゴォッ！」

そう叫ぶと、カオルを引き離しケイゴに向かって押し付けた。そしてジャケットを持つと階段を上がっていった。

「真夜？どこに行くの？」

カオルはそう言うのと、俺の後についてこようとした。

「金魚のフンじゃねえんだから、付いてくんなよ。」

そう言うのと店を出て、単車に乗りそのままサナトリウムへ戻った。久しぶりに会ったが、あの女相変わらねばタベタくつつきやがってうっとおしい・・。

ふと、さっきカオルとキスをした事を思い出すと、唇を手の甲でゴシゴシとふき取った。

サナトリウムに着くと、単車を駐輪場に隠すように置き、煙草を吸った。こうしてサナトリウムを見ていると、やっぱり俺にはDEAD ANGELにいる奴等と一緒にいる方が合っていると、思ってしまう。結局俺はここでどうしたいのかもわからないし・・。

フーっとため息をつく、煙草を灰皿に捨て自分の部屋に戻り、
ベッドへ倒れこむとそのまま眠ってしまった。

—俺は結局・・・何がしたいのか・・・—

俺のいるべき場所（後書き）

こんにちは。山口です。やっと、第10部分を執筆完了いたしました。この作品を読んで下さり本当にありがとうございます。これからも頑張りますのでよろしくお願い致します。感想等お待ちしております。

抜け出せない孤独

「真夜！真夜！」

う・ん、誰だよ、朝から叫びやがって。そのまま無視して寝ていても、声の主はずっと俺を呼んでいた。仕方なく起き上がりドアを開けると、そこには三田が俺を覗き込んでいた。

「何だよ！朝っぱらから・うっせえんだよっ」

そう怒鳴り散らし、再び寝ようとしたが三田は俺の腕を掴むと、

「ああ・よかった、ちゃんと帰ってきて。もう僕はずっと心配していたんだから。」

嬉しそうに話す三田をよそに、俺は髪を掻きながら1度あくびをするとテレビをつけた。

「ホント、この部屋いいよな。TVもあればバス・トイレもあるし・。加賀のオッサンも金あり余ってますヨネ」

自分でも思うくらい、嫌味ったらしく言ってやった。三田はそんな俺を見て、クスッと笑った。

カチンツときた・。自分の言ったことに対して笑う奴は、俺から見るとケンカを売っているのと同じだ。腹が立つ・。

「もう、いいだろ？俺が戻っているとわかったんだ。出て行けよ・。」

俺は三田を追い出すと、すぐシャワーを浴びて、着替え終わると部屋を出て仕事を始めた。

「あっ・。」

声のした方を振り返ると、そこにはあの葉山美岬がいた。俺はただ睨みつけていたが、ガキは屋上の方を指すと、

「ねえ・ちよつといい？」

そう問いかけてきた。

「で・何だよ。俺に何か用でも？」

ため息をつきながら俺は問うと、ガキはフェンスにもたれると、

「この前さく突然怒っちゃって、ビックリしちゃった。あたし何か気に触ること言っちゃった？」

こいつの言葉に思わずガクツときた……。何なんだこの女は……。この間の事全く反省してないのか？オイオイ、これだからガキは嫌なんだよ、思わず殴りたくなる……。そう思いながら煙草を取り出し、吸い始めた。

「あっ！やっぱりタバコ吸ってる！」

ああ、そういえばこの女うるさかったんだ……。しかし、そんな事に構わず吸い続けた。

「さっき、院長先生のお話少し聞いちゃったんだけど、昨日失踪したんだって？」

あ……。んの親父！どこでそんな話してんだよ……。こんなガキに聞かれやがって。

「失踪じゃねえよ！昔の仲間に会いに行ってたんだよ。」

そう言うのと、もう一本煙草を吸った。

「仲間って、暴走族の？」

「あ、ああ。そうだよ」

「うわあ！すごい。みんな單車乗り回しているの？特攻服着たり？」

始まった……。この間の件でこりた筈なのに。

「警察に捕まらないよう、こう逃げまくってさっ。もしかしてケツ持ちとかやってたの？」

俺がケツ持ちなんかするわけねえだろ！リーダーなんだから……。とかそういう問題じゃなくて……。それよりうるさい。

「あと、根性焼きとかあったり？」

うるさい　うるさい　うるさい！全然懲りてねえこの女！ホントうるさいっ。

「あゝ懂れるなあ。いいなあ」

……。一瞬間の中が真っ暗になった。このガキ自

分で何言ってるのかわかっているのか？

「不良さんとオトモダチ・いいカモ。」

ガシャンっ！この間と同じ、俺はフェンスに拳をぶつけた。

「な、何？また変な事言っちゃったとか？」

ガキは相変わらず何もわかっていなかった。

「お前・何も知らないくせについてこの間言ったばかりだろ？うざいんだよ！いちいち俺の事構いやがって・訳のわからない事言いやがって。うっとおしんだよっ」

俺は今までの鬱憤を晴らすかのように怒鳴った。そんな俺を見て、ガキはやっと大人しくなった。それを確認すると、俺は屋上から去ろうとした。そして、ガキとすれ違う時に、

「・お前が病人じゃなかったら・女であろうが俺はお前を殴ってた」

と、呟いた。振り向いたガキを睨むと屋上を後にした。

「真砂お・早く帰って来てくれよ。俺を支えてくれよ・」

なんて、すっげえ情けねえ・。ハハ・うつむいて少し笑った。

ホント情けねえ・。こんなの俺じゃねえよ、弱気になってら。そう思いながら壁にコツコツと何度か頭をぶつけていると、

「有也・」

その声のする方を見ると、ババアがヘルパーの押す車椅子に乗って俺の方をじっと見ていた。

「よおっ。バアちゃんじゃねえか！もう具合いいのかよ」

そう言いながら、俺はババアの方へ駆け寄った。ババアは自分の前にしゃがんだ俺の両手を取り、何度かその感触を確認すると

「ああ、これだ。この感触だよ、私が倒れた時助けてくれたのは。」

「
そう言う」と再び俺の手を触ってきた。

「本当にいい子だよ有也は。本当に・本当に」

その瞬間、俺は頭に血が昇った感じがしたが、その“感じ”を抑えながら

「目の前でバアちゃんが倒れてんだぜ？助けるに決まってる？別にいい子じゃねえよ」

と、微笑みながら言い、仕事があるからとその場を去っていった。

・廊下を歩きながら壁にコツコツと拳をぶつけていく・

――有也は本当にいい子だー

「くっ・・」

――この感触だ 私を助けてくれたのは――

「くっ・・くっ・・」

――いい子だ――

「くっ、くく・・ハッアハハッ！ヒャーハッハッハッハッ」

たまんねえ・・もう笑うしかねえよ。いい子だってよ！どいつもこいつも何にも知らねえんだな、何の為に俺がババアを助けたと思っ
てんだよ。親切心？冗談じゃねえ・・。ババアにはこれからまだま
だ生きてもらわねえと困るんだよ。

そして本当にくたばる時に俺は“有也”から“真夜”に戻るんだ。
それなのにあのババア気付かずに“いい子”って言うし、もうおか
しくて笑ってしまうよ。こりゃいいよ、すべて俺のシナリオ通りだ・
・。

そう笑いながら歩いていると、目の前には加賀がいた。

「何か楽しそうだね、どう？ちよっと休んであっちで話でもしな
い？」

そう言うのと加賀は俺を引き連れて庭のベンチの方へ向かった。そし
て俺の前にいつの間にか、コーヒーを差し出した。そ
れを受け取り、飲むとやっぱり“いつも通り”だった。その表情を
見て加賀は

「やっぱ、それまづい？」

その質問に対して、うなずくとすぐ加賀の方を見た。

「何で知ってるんだよって顔をしているね。すべて三田から聞い
ているし、聞かなくても大体は知っていたよ」

ちっ三田の奴・・。ホント余計な事まで言いやがって。

「どう？驚いたかよ？全然違うだろ？」

すぐに開き直って少し微笑みながら加賀に聞いた。

「んーそうだね、全く違うとは言えないけど、同じ人間でも変わるもんだね」

そう感心しながら返事した。それに対して俺はただ不満気な顔をした。

「君が、今ここでこんな風に働いている所を御両親が見たら何て言うだろうね」

「俺には両親なんていねえよ。離婚したって知っているだろ？」
親の話になると、なぜかいつもイライラしていた。他人なんかに分の家庭の事をあれこれ言われるのは、たまらない・・・。

「例え、御両親が離婚されていても、君に対するあの“権利”は・
・」

バンッ

加賀が言い終わる前に俺はテーブルを叩くと、加賀を睨みつけそのまま立ち去った。

ーダレカ オレヲ タスケテ・・・ー

抜け出せない孤独（後書き）

第11部分完了いたしました。本当にありがとうございます。物語はここから発展して行きますのでこれからもまた読んで下さいます。最終的にどうなるか予想とかがして頂けると嬉しいです。

偽り

その夜、俺はまた“DEAD ANGEL”へと向かった。

「よおっ、真夜どうしたんだよ？なんかご機嫌ナナメっぽく見えるけど？」

バーテンのカイにそう言われたが、それに答える事もなくただ差し出されたボトルを受け取って、ソファにドカッと座った。そして、ポケットから小さなケースを取り出し、そこから針を1本出すとライターで少し先をあぶり、冷めたのを確認するとすぐにそれを右の耳たぶに刺した。

貫通したのを確認すると、また刺し・何度も刺し、そして左も同じ様に刺した。

そんな行動を繰り返している内に、たちまち俺の手や服は血まみれになっていった。

「ち、ちよっと真夜、何やってんだよ！」

カオルがそう言いながら、俺に近づいてくる。懲りねえ女・・・

「何年経っても、そのクセは治ってねえんだな」

濡れたタオルを俺に差し出すと、ケイゴは言った。

黙ってタオルを受け取ると、血を拭き取りケイゴの方を見て頷いた。

「俺がお前と初めて会った時も、そうだったよな。確か高1の時だったっけ・・・お前がそれやってる時って、物凄くイライラしている時なんだよな。」

ケイゴは少し笑いながら言っていた。

昔からの付き合いだったし、俺の事はよく知っていた。だから俺がこれをする時は、必ず黙ってタオルを差し出してくる。

俺の事をよく知っているせいか、1度もそれを止める事もなかった。ケイゴは別室に俺を呼ぶと、自分のシャツを取り出すと俺に投げてよこした。シャツを着替えると、別室を出て再び酒を飲み始めた。止血した耳はまだ、ズキズキと痛みが残っていた。久しぶりにし

たあの行為・・・これも加賀が余計な事を言ったせいだ。

イライラすると、こうする事でしか落ち着く事ができないんだ。

仕方・・・ないんだ。

「ねえ、真夜あ。」

気が付くと俺の隣にはカオルが座っていた。昨日あれだけ恥をかかせたのに、よくもまあ俺の傍にいれるもんだ・・・とある意味感心していた。

「昨日の・・・あの女が帰ってくるって話、ダメだよ真夜！あの女は合わないよ。真夜が恥かくだけだよ・・・だから、」

「だから、何？真砂と会うなって？」

カオルを睨みつけ、少し優しく問いかけた。

「そうだよ！真夜とは、全然釣り合わないよ。」

カオルの言い分を俺は黙って聞いていた。

「真夜をからかっているだけなんだよ。あんなお嬢さんが真夜なんかを本気で相手にしない・・・」

パシャツ・・・

カオルは自分に起きた事を理解できていなかった。

俺は隣でうるさく喋り続けるカオルに、飲みかけの酒をかけていた。

「真夜？」

カオルは濡れた髪に触れながら、俺の方を見ていた。

「いちいち・・・いちいち・・・うるせえんだよ。お前には関係ねえことだろうっ」

そう話す俺の肩は怒りの余り、震えていた。

カオルはまだ何か言おうとしていたが、俺の様子を見て思いとどまり、そのまま奥の方へ去っていった。

ちっ、アイツのせいでここに来た目的を忘れるとこだった・・・それは“有也”の事だった。ババアに対して俺の“有也”になりきる演技は完璧な物でなくてはならない。

「オイッ 誰か有也って奴の事知らないか？」

ざわついていた奴等に向かって叫んだ。

「有也？」

「そんな奴ここにいるか？」

いるわけねえだろ！奴は死んでやがるんだから。そう思っていると、
「有也って“ルーズ”の有也の事？」

その声の主は、レイといういつも遠くの方で飲んでる奴だった。

「知っているのか？」

レイは頷くと、俺に有也の事を教えてくれた。

「ふ・ん、なるほどね。」

レイの話を聞いた後、俺は再びカウンターへ戻った。話によると、
どうやら有也は顔立ちも、境遇も俺に似ているらしい……。だが、
奴には俺にはないものがある……。

優しさだ……。非情になりきれなかった奴……。ガキを助けて事
故ツた奴。

「非情になりきれなかった……。か。」

バカらしい。族のメンバーだからもっとパンチの効いた奴かと思っ
てたら……。中途半端なバカじゃねえか。

フーッと、煙草の煙を吐いていると、

「お前、その“有也”って奴の事調べてどうするんだ？探偵ごっ
こでもしているわけ？」

ケイゴが近づいて話しかけてきた。

「んな訳ねえだろ！バカ！」

ケイゴの頭を軽く叩きながら俺は笑って答えた。

この有也の事を聞いて、俺は内心安心していた。こいつに比べる
と、俺の非情さが嫌なくらい実感できたからだ。

「真夜、1つ聞いていいか？」

バーからもう1本ボトルを持ってきたケイゴは少し真剣な顔で尋ね
てきた。

「何だよ、ケイゴ。改まって」

「お前さ、今何してんの？さっきの“有也”って奴の事とか」

ケイゴの言葉にボトルを口に近づけようとした手が止まった。下手な嘘はつけない。ケイゴとは長い付き合いだから、下手な嘘は通用しない事は知っていた。

アパートに住んでいるとも言えない……。ケイゴのことだ、アパートを訪ねた上でこんな事を聞いているんだ。

「ああ、ちょっとな。“有也”の事は気になる事があったんだけど、勘違いだった。あと、俺は今知り合いのトコに厄介になってるんだよ。」

知り合いのトコ・・嘘じゃねえ。三田や加賀は俺の知り合いだし。有也への勘違い・・これも嘘じゃねえ。そう思っていると、

「ふ・ん、そうか。ならいいんだ」

そう納得したかのようにケイゴは言った。あと少しで本当の事を言ってしまうところだった。

「俺、帰るわ・・」

ジャケットを着ると単車のキーを持って、ケイゴから逃げるように階段を上がっていった。そして、“DEAD ANGEL”を出て単車に乗ろうとした時、後ろからカイが追いかけてきたのに気がついた。

「真夜、何があったかは知らないがケイゴには言えよ」

カイはそう言うと、再び店に戻った。言ったところでどうなるんだ。テメーもサナトリウムで働くのかってんだっ。俺と同じ様に周りの人間共に同情されたり、騒がれたり・・冗談じゃねえ！

「バーカッ！」

そう呟くと、単車に乗りサナトリウムへと向かった。

一誰にも“俺”をみせてはならない・・一

狂い始めたシナリオ

翌朝、目が覚めると時計の針は10時を指していた。

ああ・朝メシ食い損ねたな・。そう思っていると、何やら外からざわざわと声が聞こえてきた。

部屋から出て、下を覗いてみると・。ああ、退院するんだな。ガキが両親と手をつないで看護婦や加賀と笑いながら話をしていた。そのガキの幸せそうな顔を見ると、妙にイライラしてきた。

“ナオツテ ヨカッタネ パパママト マタクラセルネ”

“ガンバッタカラ ビヨウキモ トンデイツチャツタンダヨ”

こんなの俺には

“コノクタバリゾコナイ!”

そんな風に聞こえる・。お前等の中で・。もしかすると両親のうちどちらかでもそう思っているんじゃないの? って言ってやりたくなる。病氣になったらもうすぐに、死んで欲しいと思ってたんじゃねえとか・。

それなのに、ここにいる奴等全員善人ヅラしやがって。

そう思っていると、自然と口元が笑っていた。ホントにバカバカしい。そしてこんな所にいる俺もバカバカしい・。

夜中に“DEAD ANGEL”で遊んでいても、結局はここに戻ってしまう。シナリオの為とはいえ・。

「真夜」

振り向くと、そこには三田がいた。俺が夜中遊びに行くようになったせい、最近三田はよく顔を見せるようになった。

「ホント、呆れるくらいマメだね・。そんなに俺の事を見たい?」
少し嫌味っぽく言ったが、三田は言葉ではなく笑顔で返した。これは一体どういう意味なんだ? 気色悪い・。

「本当の事を言うとな、心配だったんだ。夜中に出歩くようになって、もしかしてここにはもう戻って来ないんじゃないかって。けど無駄な心配だったかな」

三田は1人で嬉しそうに話をしていた。

「あんたって、つくづくバカだなって思うよ。俺がここへ戻って来るのは、シナリオ通りなんだよ。昨日俺はシナリオを完璧にする為、本物の有也の情報を得てきたんだから・・・。」
俺は笑いながら続けた。

「せっかく こんなおもしろい“遊び”を思いついたのに、途中でやめる訳ないだろ？それなのに、俺の事を心配しているなんて・・・あんたメデテーよ」

言い終わると、煙草を取り出し吸い始めた。思った事を、すべて外に出して気が済んだ筈なのに、イライラしていたせいかまた耳元がズキズキと痛み出した気がした。

イライラしているのは、三田が怒らないからだ。俺がどんなにひどい事を言ってもこいつは俺を殴りもしなければ、怒りもしない。それがかえってイラつかせる。

「まるで・・・俺には出来ないよって言ってるみたいだな、三田さんよお」

すると三田はニツコリと笑い、

「出来ないよ、真夜はそんな事できないよ。絶対に」

・・・断言しやがった・・・。三田が俺に。

“オマエニ ソンナコト デキルワケネエダロ”

“ミエ ハリヤガツテ オマエハ バカカ？”

三田が言った事は俺にはこう聞こえた。

イヤダ・・・イヤダ・・・ジブンガ ワカラナクナル・・・

俺は三田を見る事もなく、その場を去っていった。

イヤダ・・・イヤダ・・・。俺のシナリオは完璧なんだ。

そんな言葉が頭の中を駆け巡っていた時、携帯が鳴っているのに気付いた。ケイゴからだ・・・。

「はい・・・どうしたんだ？」

ケイゴが昼間に電話を掛けてくるのは珍しかった。

「真夜・・・落ち着いて聞けよ・・・。さっきな・・・」

「・・・えっ・・・」

ケイゴの口から出た言葉に思わず持っていた携帯を落としてしまった・・・

一さっきな水原が訪ねて来たぞ・・・お前の事で－
こんな事、俺のシナリオにはない展開だった・・・

・・・イヤダ・・・イヤダ・・・

これがきっかけで何かが変わってしまうような気がした。

狂い始めたシナリオ（後書き）

第13部分「狂い始めたシナリオ」はいかがでしたか？最後に出てきた、“水原”さんは真夜の何なのか、想像して下さると嬉しいです！（ちなみに女性です）＜br＞

自我の崩壊

一水原、いろいろ聞いてきたけど、俺もカイも何も知らないって
言っておいたから・・・ここにも来てないって。一応言っておいたか
ら・・・一

イヤダ・・・イヤダ・・・

一お前、年少出た事、親に言っただけだったのか？・・・まあどうい
う理由で水原が動き出したか知らないが・・・気を付けろよ一

イヤダ・・・イヤダ・・・

気がつくのと、俺が着ていた真っ白のシャツはいつの間にか真っ赤
に染まっていた。

そう・・・また例のクセが出ていた。

もう、ほとんど痛みがない・・・ただ大量に赤い液体が流れるだけ・・・

電話を切ったのに、俺の頭の中ではさっきのケイゴの言葉がずっと
駆け巡っていた。

その度に・・・イライラする。

俺のシナリオは完璧だったんだ。それなのに、思いもよらない登
場人物のせいで、それがだんだん崩れていく。本当に予想外の展開
だから・・・

「イヤダ・・・イヤダ・・・。誰にも壊させない・・・せっかくのシナ
リオ・・・イヤダ・・・イヤダ・・・」

カタカタと肩を震わせながら、俺は呟き、再び針で耳を刺してい

た。イヤダ・・・!

「真夜っ!」

ハッ和我に返ると、三田が青ざめた顔で入り口に立っていた。

「何しているんだ!自分で自分を傷つけるなんて・・・血だらけじゃないか・・・」

「うっせーな!離せよ。これは俺の体なんだ。どうしようが勝手だろ!」

必死に止めようとする三田の手を振り解き、再び刺そうとした時だった。

「えっっ・・・?」

頭がグラツとなり、視界もぼんやりした感じが来るとそのまま倒れてしまった。

「真夜!しっかりするんだ!」

ーああ・・・もうどうでもよくなってきた・・・。ー

「真夜!真夜!」

ん・・・何か声が聞こえる・・・。

「う・・・ん、う・・・」

目覚めると、見覚えのない天井、そして三田の姿がそこにあった。

「真夜!大丈夫か?」

そういえば・・・まだ頭がグラグラして気持ち悪い・・・。あと左腕もチクチクと・・・ん?

「何じゃこりゃあっ!」

チクチクしていたのは、点滴がしていたからである。そしてよくよく見てみるとここは病室じゃねえか・・・。

「真夜、君はさっき倒れてしまってここに運ばれたんだよ。原因はわかってるよね?どうしてあんな事・・・」

三田は両手で顔を覆っていた。ああ今日はいつもより加減なしで刺したからな・・・。出血多量でバターンときたか。

「真夜、さっき加賀から聞いたが君、耳を傷付けるの今回が初めてじゃないね。何回も何回も何ヶ所も傷付けてるね・・・一体どういう・・・」

「うっせーんだよ！こっちは病人だぜ？大人しくさせてくれよ」

三田が言い終わる前に言い返したが、三田もまた負けてなかった。

「自分の体を何だと思っているんだ！」

「俺自身の事なんだ！ほっといてくれよ」

三田に掴まれた腕を振り解き、強引に布団に潜り込んだ。

三田はその布団をめくってまだ何かを言おうとしたが、すぐ落ち着くと

「真砂さんはどうするんだ？せっかく帰ってくるのに君が待ってあげなくてどうするんだ」

三田の言葉に一瞬動揺してしまった。

真砂・・・もうすぐしたら帰国する真砂・・・

しかし、すぐに我に返った。

真砂が俺の元に帰ってくるという保証はあるのか？誰が言ったんだよ・・・勝手な事言うなよ。

俺の事何も知らないくせに・・・

「知った口利くんじゃねえよ！」

三田に叫ぶと、ベッドから降り部屋から出ようとしたが、点滴がついてうまく走る事も出来ない・・・それに医者から絶対安静だと言われている。

仕方がないので、三田を追い出すという条件でベッドに戻る事にした。

真砂の事なんか勝手に話すなよ。何でも真砂・・・真砂・・・と言えばいいってもんじゃねえんだよ。腹が立つ・・・

このサナトリウムにやって来て、あのババアによって“有也”と勘違いされた事によって生み出された俺のシナリオ・・・思わず出来すぎてはいないか？と疑ってしまうくらい順調に進んでいたのに、何かと邪魔が入ったり、思わぬ登場人物が入ったり・・・

俺は自分でもどうしようもない位、我がままだから自分が「これだ」と決めたものが思うようにいかなかったら、すぐにイライラする・・。

イヤダ・・イヤダ・・これは完璧に仕上げたいんだ。
俺の邪魔をしないで・・。

しかし、さっきのケイゴの言葉がしつこく頭の中に響いた。

一水原が訪ねて・・一水原が訪ねて・・一
一体何の為に・・今更どうして現れたのか・・。

だが、このサナトリウムまで来ないという事は、三田や加賀は知らせてないという事なんだよな。それには安心していた。

その時、コンコンとノックと共に加賀が入ってきた。

「やあ、さっき目が覚めた時、三田とケンカしたんだってね。うんうんその調子ならもう大丈夫だね」

いろいろな事が頭を駆け巡りすぎて、加賀に何を言われてももう言い返す気にもなれなかった。ただ、俺の事を放ってほしいと思った。

しかし、加賀はそれから何も話そうとはせず、ただ椅子に座って俺の腕に付けられていた点滴をずっと見ていた。

2人とも黙っていたので、ただ時計の秒針が動く音だけが部屋中を響かせていた。

しばらくして、点滴が終了したのを確認すると、加賀は俺の腕から針を抜き、簡単に手当てをすると

「お大事に」

と、それだけ言い残しその場を去っていった。

いつもの加賀からは考えられないくらい静かだったので、ただ驚くだけだった。

そんなことはすぐにどうでもよくなり、また俺は眠りについてしまった。

一オレノ ココロガ コワレテクル ソンナ キガ スル一

罰

目が覚めた時、部屋は真っ暗だった。

そばにあった電気を付け、時計を見るともう夜中の12時を過ぎていた。

ベッドから降り、ベランダに出てケイゴに連絡をしようとした時、逆にケイゴから電話がかかってきた。

「真夜？ 一体どうしたんだ？ 水原の事気にして来ないのか？」

ケイゴからそこに水原がいないのを確認すると、携帯を切り自分の部屋に戻った。

そして、キーとジャケットを持ち出すと、外に出て単車に乗りDEAD ANGELに向かった。

しかし、DEAD ANGELに着いた時、一瞬目を疑った。

いつもは入り口の近くには、多くの単車や車が並んでいるのに、今日はそれが1台もなかったからだ。

単車から降り、ドアに近づくと、そこには“本日貸切”という札までが付いていた。

ケイゴとカイの奴・・・一体何を考えているんだ。

中に入ると、カウンターにはケイゴとカイの2人しかいなくて、いつも鬱陶しいくらい騒がしさは微塵も感じられなかった。

階段を1段1段降りていくと、ケイゴは俺の方を振り返った。

そして、俺の耳の怪我を見ると、1回深いため息をしていた。

カイは俺にそこに座るよう指示をすると、自分は中からボトルを出し、俺の前に差し出した。一体何なんだ・・・。

「オイッ、どうしたんだ今日は・・・貸切なんかにしやがって。」

俺が笑いながらそう言っても、2人は何も言っては来なかった。

「俺とお前が初めて会ったのは、確か高1の時だったよな。」

突然ケイゴが重い口を開き話し始めたが、何だ？ イキナリ出会った

頃の話なんか持ち出して・・・一体どうしたんだ。

「俺たちは高校は全然違ったけど、意外な事で知り合ったんだよな」

ケイゴはそのまま話を続け、カイはただグラスを拭いていた。

そう、ケイゴの言うとおり俺達は出会うまで全く異なった生き方をしていた。

ケイゴは中学からバリバリの不良だったので、高校生になってもそれは引き継がれ高校もまた、あまり評判の良いとは言えないトコに通っていた・・・そして・・・俺は・・・

「俺が他校の奴等とケンカして、路地裏に行ったら・・・名門藤宮学園の制服を着たヤローが煙草吸っているじゃねーか。」

「それが・・・真夜、お前だったよな」

ケイゴが言った後、カイがボソツと言った。

そう・・・俺は高校の時、今とは全く違う生き方をしていた。

「懐かしいよな・・・ホント」

ケイゴは呟いた・・・

罰（後書き）

第15部分まで読んで頂き、ありがとうございます。＜br＞今回は今までの真夜視点を、ケイゴ視点に変えて2人が出会った時のエピソードを書きたいと思います。＜br＞2人はどのようなように出会ったのか、そしてケイゴはなぜそんな話を急に始めたのか、想像して下さいと嬉しいです。

5年前 side 圭吾 (前書き)

この章はケイゴ視点で書いています。2人が初めて出会った頃の話です。

5年前 side 圭吾

「ハアツ・・・ハアツ・・・痛ってえ、チキショウ・・・三浦高の奴等
今度会ったら・・・マジ殺す！」

さすがに3対1では負けてしまうな・・・イテテ・・・周りの奴等が
じろじろと俺の方を見てやがる・・・。クソッ！

俺は仕方なく、殴られた所をおさえながら、路地裏の方に歩いて
いった。

だが、そこで俺は思わず目を疑ってしまった。

俺なんかとは、全く世界が違うとも言ってしまったてもいい位の名
門藤宮学園の制服を着た奴が、地面に座り込み煙草を吸っていたか
らだ。

藤宮学園といえば、1・2位を争うトップクラスの学校だぞ・・・
そんなお坊ちゃんが・・・。

フンっどうせ中身はただの弱虫だ。金でもまきあげてやろうか・・・
ちよつと脅したら、だまって財布でも置いていくだろう。

そう思いながら近付こうとした時、目の前で起こった光景を目の
当たりにして俺はギクツとし、足がそこから動かなくなった。

“奴”は持っていた針を突然自分の耳に刺したのだ。ピアスを開
けているのではない・・・何回も何回も手が血で赤く染まるまで刺し
ていた。

その時の奴は無表情だったが、なぜか怒りが感じられていた。俺は
ただ、その様子をじっと見ているだけだった。

その時、自分の耳を刺していた奴の手が止まったかと思うと、奴
はこっちを見ていた。

そして、冷めたような目付きで、

「何ジロジロ見てんだよ・・・バカか？テメーわ」

そう言ってきた。俺はやっと我に返ると

「名門藤宮学園のお坊ちゃんが煙草なんて吸ってもいいのかな？黙っていて欲しけりやここに財布置いて去れや！」

逆に睨み返し、脅迫したが奴はこれに対して

「言いたけりやあ言えよ。別にどうって事ねえよ」

その時の奴の余裕のある笑顔にまた怯んでしまった。

まるで、怖いものなど何もねえよという顔だったからだ。

「このヤロー！生意気な事言いやがって・・・」

奴の顔に1発殴ろうとしたが、その前に奴の足が俺の腹に蹴りを入れていた・・・。

「ゲホッ・・・痛ってえ・・・」

ケンカでやられた腹にさらに奴が蹴りを入れてきたので、あまりの痛さに思わずしゃがんでしまった。

そして、奴は俺の前に来て同じ様にしゃがみ込んでくると、

「言いたけりや、言えよ。どうでもいいからさ・・・」

そう言い残し、奴は俺の前から姿を消した。

「何なんだ・・・あいつは・・・」

タダ者じゃねえ・・・そう思った。

一言いたけりや、言えよー

そんな事出来なかった。してはいけないとすら思ったくらいだ。

「ああ・・・痛ってえ・・・あいつとは2度と会いたくないな。次は殺されるかも・・・」

そんな恐怖心もあった・・・が、そうはいかなかった。

翌日の夕方、俺はまた奴と出会ってしまった。

しかし、今度は昨日とは比べ物にならないほど、人格が変わっていた。

「相田くーん！中間考査また1位だったんだって？すごいなあ、どうしたらそんな風にできるの？」

「うーん、どうって言われてもなあ・・・ただ毎日子習・復習しているだけだよ・・・」

この会話を陰で聞いていたが、ただ驚くだけだった。昨日とは全く

違っていた。

制服は、シャツの1番上のボタンを外し、ネクタイもしてなくて、シャツもズボンから出していて、持っていたのは煙草・・・そして血だらけだった昨日の奴は、今日は整った制服（昨日の血の付いた制服は？）に眼鏡もかけ、また優秀そうなお坊ちゃん・お嬢ちゃんにちやほやされ、手に持っていたのはぶ厚い辞書だった。

「何なんだ・・・あれは・・・」

俺が呟いた時、ふと奴と目が合ってしまった。

一瞬、ギクつとしたが、奴はそのまま目を反らした・・・。

何となくホッとしたが、気が付くと奴は再びこっちを見ていた・・・。その時の奴の顔は昨日と同じ、冷めた表情で・・・俺に笑みを浮かべていた・・・。

奴はそのまま去っていったが、俺はその場から動けなかった。

あいつを本当に怖いと思ってしまった・・・。

それから・・・どんなに奴に会わないようにしても、なぜか奴は俺の前に現れてきた・・・。

〈5年前〉side圭吾（後書き）

次回からまた現在に戻ります。今回は真夜の正体を全て描かないで、1部だけ明かしました。真夜はどういった家庭で育ったのかは、後に書きますので楽しみにして頂けると嬉しいです。

かけがえのない友情

「俺はその時、本当にゾクツとしたよ。こいつを敵にしてはいけないって心底思ったよ・・・」

ケイゴは少し微笑みながら言った。

そんな事も、そう言えばあったよな・・・。その後、確か俺が族に入っている事も教えたならマジで驚いていたっけ・・・。それから何回か会う内に少しずつ“親友”に近付いたよな。

「俺はお前がずっと隠してきた“あの事”を・・・自分が受けてきた辛い事を、俺なんかに打ち明けてくれた時は本当に嬉しかった。その時やっとな俺達は親友になったんだって思ったよ。」

ケイゴはどことなく、悔しそうな表情を見せていた。話している内容は懐かしく、嬉しいもののに・・・。

「あれから・・・お前は何でも俺に話してくれると思っていたのにな・・・」

そう呟くと、ケイゴは手で顔を覆っていた。

「ケイゴ、俺は何でもお前に話しているじゃ・・・」
ガッツ!!

俺が言い終わる前に、ケイゴは殴りかかってきた・・・その拍子で俺は椅子から倒れた。

「なっっ・・・」

起き上がろうとしたが、すぐにケイゴは俺の上に乗リシャツの襟を掴むと、

「だったら何で黙っていたんだ! お前が今サナトリウムにいる事を!」

・・・っ!

一瞬頭の中が真っ白になった。ケイゴは手を離すとフンツと笑い、「何故、知っているんだって顔しているな。そのサナトリウムにこの間まで俺の甥っ子が入院していたんだよ。退院する時、遅れて

顔出してみりゃ、上のテラスにお前がいるじゃねえか！」

ケイゴはさらに話し続けた。

「帰って、その子に聞いたんだよ。“あのお兄ちゃんはどこ悪いのか？”と……。そしたら思いもよらない言葉が返ってきたよ、“あのお兄ちゃんは、あそこで働いているんだよ”って」

ケイゴの言葉1つ1つは、どれも震えていた。怒りが込み上げているのがよくわかった。

甥っ子っていうのは、まさか昨日俺が倒れる前に退院したあのガキか……。まさかケイゴと繋がりがあったなんて……。

「俺が！俺がその時どんなにショックを受けたかわかるか？お前を信じていた俺の気持ちかわかるか？」

ケイゴはもう1発殴りかかろうとしたがカイに押さえられていた。

「俺だって、お前等の事親友だと思っている。」

「だったら何故言ってくれなかったんだ！本当の事を……なぜ……」

ケイゴはカイに押さえられながら言い返してきた。

「言おうと思った……。けど知っているだろ？俺の事……。信じたい奴に対しても100%信じる事が出来ないって。不安がある事……。親友ならそれ位気付けよ……」

そう言っていると、俺はそのままうつ伏せになり顔を隠した。

今、言った事は本心だった。俺には100%信じる事が出来る人間はいない。あの真砂に対してもだ……。いや、俺がこうも人を信じられなくなったのは、真砂が俺に黙って姿を消した事が原因だった。

ケイゴとカイはそれから何も言わなくなった。

しかし、最近何かと荒れていた俺にとって今回のケイゴの行動は嬉しかった。これは嘘ではなく本当に嬉しかった。そう思うと、余計顔が赤くなってきた。

それから10分くらい俺達は沈黙を続けていた。

カイは相変わらずグラスやカウンターの手入れ、ケイゴは座ったま

ま、俺はうつ伏せで顔を隠したまま……。何を話したら良いのか……。よく分からなかったが、ただ1言自然に口から出てしまった。

「腹減った……」

「腹減った……」

「腹減った……」

俺たち三人とも同時に同じ事を発していた……。一瞬3人ともキョトンとしていたが、すぐに顔を合わせるとだんだんと笑いが込み上げ……

「ぶっ……わっはっはっはっはっ！」

と、笑ってしまった。これはもちろんケイゴもカイも同じだった。

例え、言い争いをしていても考える事は同じだった。

カイは笑いながら、キッチンへと向かうと3人分の食事を作ってくれた。そして、それを食いながら俺は2人に年少を出てからの事を全て話した。

俺が全て話し終わった後、ケイゴとカイは少し黙っていた。ケイゴは1回天井を見上げると、

「わかった、これで全部なら今度こそ俺等はお前の事を信じてもいいんだな？」

そう念押ししてきた。俺はその問いに深く頷いた。

「それならいいんだ。お前がそのサナトリウムで何をしでかそうと考えても、別に俺は止めたりしない。1つ言っておく、俺とカイはお前の味方だ。それは覚えとけよ。」

ケイゴがそう言った後、カイも頷いていた。

「水原の方はどうするんだ？もうここには来ないと思うが……ひよっとしたらサナトリウムの方に……」

「それはねえよ。いくら水原が優れていても、そこまでは探り出せねえ。俺がサナトリウムに入った時、三田と加賀には強く口止めたから……」

カイの一言に対して、俺は否定した。しかし内心は不安だらけだ

った。

もしかしたら、今頃俺の居場所を付き止めているのかもしれない・・
。そんな俺に2人は万が一また水原が来ても、とぼけたフリをして
おくと言ってくれた。

DEAD ANGELの入り口で、俺は2人に何かあったら必ず
相談すると約束し、サナトリウムへと帰っていった。

その時の俺は体の中につまっていた重いカタマリが一気に無くな
った様にすっきりしていた。

かけがえのない友情（後書き）

更新が大幅に遅れてしまってます。続きを待っていて下さった皆様、お待たせいたしました。

解かれた枷

翌朝、俺がまたいつも通り仕事をしていると、向こうからババアが近付いてきた。

「有也、最近あまり見掛けなかったけど、どこか悪くしていたのかい？」

ババアの言うとおりに、ここ最近ババアとは会っていなかった。いや、会おうともしていなかった。だが・・・この様子だと、まだ当分くたばりそうにもないって事だよな。まだくたばるには早すぎるからな・
・安心したぜ。

そう内心想いながらも、俺はババアに笑いかけると、

「大丈夫だよバアちゃん、バアちゃんこそ体に気い付けろよ」

ババアはうんうんと頷くと、持っていた手さげ袋から2、3個和菓子を取り出すと俺に与えた・・・だから、俺は和菓子とかはダメなんだってばよ・・・！

しかし、目の前に出された物を無視する訳にもいかない・・・。しぶしぶそれを受け取ると、ジーツと俺を見るババアの前で俺は、和菓子を口に入れた・・・グェっ・・・。

「おいしいだろ？また持ってきてやるからね」

そう言うと、ババアは自分の部屋へと帰っていった。その姿が見えなくなると、俺は飲み込まず口に入ったままの和菓子をゴミ箱に吐き出した。

水原の登場によって、一度は狂った俺のシナリオも何とか無事に持ち直しているし・・・今の俺には昨日までと違って、余裕さえ見られた。

「煙草吸いてえな・・・」

しかし、この時間患者共がたくさんうろついていやがる・・・。仕方なく俺は屋上へと上がっていった。

扉を開けると、もうすぐ12月になるだけあって冷たい風が吹い

ていた。フェンスの方まで行き、煙草を吸っていると俺の他に何人か患者がいる事に気付いた。一瞬、煙草を捨てようとしたが・・・こは外なんだ。別に吸っていても構わないという気持ちが出てきた為、さらに何本も吸い続けた。

空が赤くなるまで俺はここにいた。周りの奴等はずっと下へと降りていた。

一人でうつむき煙草を吸いながらボーっとしていた俺の前に、誰か人が立っている気配がしたので上を見上げると、それは“葉山美岬”だった。また・・・会ってしまった。

「何だよ・・・また何かうるさく言いに来たのかよ」

俺の問いに“葉山美岬”はただ首を横に振っていた。今日はいつもと様子が違うな。大人しいし、一体何を考えているのやら・・・
そしてガキは俺の顔をジッと見ると、

「耳のケガ・・・もう大丈夫なの？」

と、小さな声で尋ねてきた。

「ああ・・・これ。別に慣れているから平気デス。どうも・・・」
そう冷たく言うと、こいつは何かホッとした表情を見せていた。

「ちよつと心配してたんだ。そのケガ、ストレスによる物だったら、私の一言・・・一言じゃないか、たくさんの言葉も原因の一つかって。この間、あなたが運ばれているのを見た時そう思ってしまった。反省してる・・・」

おいおい・・・？ 本当に今日はどうしたんだこの女は。変なクスリでも飲んだか。

こいつがこんな態度だと、こっちまで何か調子狂うぜ・・・。

「別に、あんたが原因じゃないから安心しろよ」
そう言い放つと、俺は再びボーっとし始めた。

「ねえ、あなたって好きな人いる？」

「あっ？」

突然の質問に俺はただガキを睨んでいた。イキナリ何を言うんだこの女は・・・。しかし、ガキはずっと俺を見ていた。

「あーっはいはい！いました、いましたよ！好きな人いました。」
そう答えると、今度は“どんな人？”と聞いてきた。どうして今更
こんな世話さなければいけないのか・・・。

俺は真砂の事をガキに話してやった。どんな女だったか、どうし
て今は付き合っていないのか・・・など。そう話しているうちに、だ
んだんと俺は自分がむなしくなっていた。

俺の話が終わると、“葉山美岬”はホーッと息を吐くと、俺の方
を見て

「私も、その真砂さんだったら同じ事してる・・・」
と、一言呟いた。同じ事というのは事故った後、俺と別れた事を言
っているのか？何言ってるんだ。

「だって、縛り付けたくないもの・・・。それにあなたは気付いて
なかったかもしれないけど、真砂さんかなり苦しんでいたかも知れ
ない。大好きな人に支えてもらえるのはとても幸せだけど・・・本人
は幸せだけど、じゃあ支えている方は？私は幸せ・・・じゃあ、あな
たは？そういう気持ちがだんだんと支配してきて、締め付けられて
とても苦しくなるの・・・。支えられれば支えられるほど、それはひ
どくなるの。」

こいつの言葉次第では、いつもみたいに“何も知らないくせに”
と言ってやるつもりだったのに、今回は何も言えなかった。何もか
もこの女の言う通りだった。

真砂が事故に遭って、俺は変わらず彼女のそばに続けた。それ
だけで、俺は嬉しかった。

しかし、真砂は？俺の前では笑顔を見せていたが、俺がいなくなっ
た時は？もしかしたら・・・いや絶対苦しんでいた筈だ。

俺が優しくする程、彼女にとっては重荷になってきて・・・。そん
な事も俺は気付いてやれなかった。

“葉山美岬”はそんな俺を見ながらさらに話を続けた。

「そして、だんだん思うようになるの。“このまま頼っていたら
ダメだ”って。弱くなった自分から抜け出す為に1番辛い事をしな

ければならないの。それが真砂さんの場合で言うと、あなたに黙ってアメリカへ行き、足を治す事だったと思うの。別れたのも、きつと縛り付けなくなかったんじゃないかな・・・」

これはあくまで、この女のたわ言だ。だが、俺は真砂本人もそういう気持ちで・・・と密かに信じようとしていた。

“葉山美岬”が話し終わった頃には、空もうす暗くなっていた。

「あー長い事お話ししちゃった。ごめんね、また生意気な事べラベラしゃべって。」

「いや・・・ありがと・・・」

今回は、不覚にも礼を言ってしまう結果になった。けど、こいつのおかげでつかえていた何かが取れた気がした。

“葉山美岬”は一度頷くと、下へ降りていった。それを見届けた後も俺は屋上に残り、煙草を吸っていた。そして携帯でケイゴに、

「今日は行かない・・・」

と、一言だけ伝えたと再び空を見上げた。

—ごめんな、真砂—

解かれた枷（後書き）

第18部分更新いたしました。作品を読んで下さり本当にありがとうございます。これからも頑張りますのでよろしくお願い致します。次回はカオルが久々に登場します。

氣付かなかった友情

昨日、葉山美岬に言われた後、俺は自分を責めていた。

俺は待っているだけだった……。真砂が俺に黙ってアメリカへ行った事に対し、ただ悔しいと思いながら待っているだけだった。

俺は追いかけてようとしなかったし、連絡もしなかった。真砂の父親からの手紙で、連絡先なども分かっていたはずだ。

例え、しつこいと思われても追いかけるべきだった。後悔が俺の心を蝕んでいた。だが、そういった行動に出なかったのは、きっとどこかで怖がっていたからかもしれない。真砂を追いかけてアメリカへ行ったとしても、拒否されるかもしれない……。

“もう、君はいらないから”

そう言われるかも知れないと思っていた。それがやはり怖くて怖くて……。真砂は決してそんな事を言う女じゃない事は分かっているが、言わないだけで心の中ではそう思っているんじゃないかと、だんだん悪い悪い方へと考えが進んでいって……。結局、待っているだけを選んでしまった。

「あゝっ、俺はどうしたらよかったんだよ！」

イライラしながらも、頭の中では真砂の事でいっぱいだった。

「とりあえず、拭いた方がいいんじゃない？」

そう、真砂を拭いてもっと綺麗に……。って。振り返ると、声の主は葉山美岬だった。

「な、何だお前？何を拭くってんだよ。いきなり現れたかと思ったら訳のわかんねえ事言いやがって」

すると葉山美岬は俺の足元を笑いながら指してきた。指差す方を見ると、あたりは水浸しになっていた。

「うおっ！！」

そういえば、仕事中だったのをすっかり忘れていた。考え事をしていたでモップでバケツを倒していたのかよ……。最近ボーっとし

がちだなあ、オイッ。まあ、ほとんどは真砂の事なんだけれども。とりあえず床を拭いたが、葉山美岬はまだいた。

「何？俺に何か用ですか？お嬢さん」

葉山美岬はただ首を振っていたが、何かをひらめいたかのような顔をしたかと思うと、突然俺のシャツを掴んで、

「下の名前・・・何だっけ？」

その瞬間、ガクーンとしてしまった。この間教えたばかりだぞ・・・。えらく記憶力の悪い脳をお持ちなんだな。

「真夜、真夜です。もう聞くなよ」

仕方ないので教えると、葉山美岬はうんうんと頷いてニッコリ笑い、

「わかったーちゃんと覚えとく！それじゃあね！真夜！」

元気よく答えると、そのまま走り去っていった。ったく、何なんだあの女は。人の名前を聞いたかと思うと、さっさと去りやがって・・・。訳のわかんねえ・・・あつ、

「さりとて人のこと呼び捨てにしてんじゃねえよ！」

すでに誰もいない廊下に俺の叫び声が空しく響いた。俺の方が年上なんですよ！

だけど、別に怒っている訳ではなかった。以前ならすぐ追いかけて、一発殴っていたかもしれない。まあ、あの女には真砂の事で小さな借りがあるからな。ケイゴ達ではなく、あの女にあんな事言われるなんて意外な事だった。

その時、携帯の着信音が聞こえた。誰だと思いつつ、携帯を見るとため息が出た。

「はい。ああ、わかった。今から行く」

簡単に答え電話を切ると、そばにあったモップとバケツを片付け、部屋に戻って着替えてから“相手”が待つ場所へと単車で向かった。めんどくせーな・・・ホント。

目的地へ着くと、すでに電話の主は待っていた。

「・・・で、こんな時間に俺に何の用だよ。カオル」

カオルは自分が乗っていたスポーツカーから降りてきた。

「何の用って、ただ真夜に会いたかったの。だって最近会ってないし、この間だってケイゴとカイが店を貸し切りにしてさ。理由聞いても教えてくれないし。昨日も真夜店に来ないし……」

ホント、女ってのはよく喋る生き物だよな。ある意味感心すら覚える。

「真夜、族にいた頃は優しかったのに……。どうしちゃったの？突然変わってしまったって、あたしがどんな気持ちで待っていたか分かる？年少出ても店には戻って来ないんじゃないかって、ずっと不安だった」

相変わらず一人べらべら喋るカオルの横で、俺は欠伸をしながら聞いていた……。ような聞いていないような……。

「けど、あんたが店に現れた時どんなに嬉しかったか。それなのにあんたの心の中にはまだあの女がいた！」

そう言い放ったカオルの目には、涙が溢れていた。カオルは必死に我慢していたが、涙はカオルの意思を無視して頬に流れていった。

「カオル……」

俺はそんなカオルに手を差し伸べたが、カオルはそれを払い除けバッグからハンカチを取り出して拭いていた。そして再び俺の方を見ると、

「たとえばあの女が現れても、あたしは何もしない。あの女を傷付けたりしない。真夜が好きだから……。真夜の大事な女だから」

カオルの言葉に、俺は思わず驚きの表情を見せていた。俺の予想では、カオルはもし真砂が俺の元に帰ってきたら、何らかの手段で真砂を傷付けると思っていたのに……。

「カオル……お前」

「どうせ、真夜はあたしがあの女に手を出すと思っていたんでしょ？バカにしないでよ」

カオルはそう言うと、少し笑って煙草に火をつけた。そんなカオルを俺は今までとは違う目線で見ていた。ただ鬱陶しいだけの女で

はなかったんだな……。そんな風に思った俺もまた、笑っていた。
カオルはそんな俺を見ると、煙草を捨て踵で擦り付けた。

「どう？ せっかくだから、これからちょっと遊びに行かない？」
カオルの誘いを断る事もなく、俺はそのままカオルの車に乗って
いった。

ホント、俺は人間を見る目が無いんだな……。今更気付いてし
まった。

何も考えず・・・

「それじゃあ真夜、また“DEAD ANGEL”でね」

カオルは俺をさっきの公園で降ろすと、再び車を走らせ去っていった。俺はそれを見届けると、単車を置いていた所まで行き、サナトリウムへと帰っていった。

サナトリウムに着くと、すぐにケイゴに今日の事・・・つまりカオルの事を話した。俺が話す一つ一つの内容に、ケイゴはただ驚いていた。

無理も無い、俺は今までずっとカオルの事を毛嫌いしていたから。族にいた頃も、優しかったとカオルは言っていたがそれは偽物の優しさで、本当は物凄く鬱陶しかった。

皆の前で、彼女ヅラして俺に触れてくるカオルにどれだけ嫌気がさしていたか・・・。そんな俺をケイゴはよく知っていたから、今日の話を聞いて驚いているのも仕方が無い。俺本人でも驚いているのだから・・・。

とりあえず、1つの問題は解決した。カオルが約束してくれたから、真砂が帰ってきてても安心できる・・・。そう思っていると、急に肩の力が抜けてきた。

ベッドの上でボーっとしていると、ノックが鳴り三田が入ってきた。

そういえば、三田と会うのは俺が倒れた時以来だったな・・・。

確か、めっちゃくちゃ言い争っていたような・・・。そう思い出すと、自然と背を向けてしまった。子供か、俺は・・・。

でも、面と向かって何を話せばいいか分からなかった。

「真々夜っ！お久しぶり。加賀から聞いていたけど元気になったみたいだね、よかったよかった」

三田はコクコクと頷きながら、そう言った。

なんだ・・・？こいつは俺と言い争いになった事、頭の中から消

えているのか？

俺は、自分1人が真剣に悩んでいたのに対して馬鹿らしくなってきた……いや、悩んでいた訳じゃないが。どうも三田のこんな様子を見ると、調子が悪くなる……。

こいつの性格には、ある意味尊敬さえしてしまうよ……。

「あれから……真砂から何か連絡来てる？」

俺の質問に三田は首を横に振った。その答えに俺は、ああ……やっぱりとしか思わなかった。でも、心の中では少し期待していた。

“もう、そろそろ……もう、そろそろ帰ってくるんじゃないか”

“今頃、日本に向かってる飛行機の中にいるんじゃないかな？”
時々そう思いながら、笑顔になっていた。

「大丈夫だよ、真砂さんが帰ってきたら連絡してくれるよ。それまで楽しみにしておきなよ」

三田の言葉に対し“ああ”と答えつつも、心の中では

“楽しみになんかできるわけないだろ”

と思っていた。帰ってきてても、連絡が無ければ俺は何も知らないままずっと待ちぼうけ……。冗談じゃない！悪い方へと考えている自分が嫌になってくる。

それから俺はまた1人、部屋でボーっとしていた。何も考える事もなく俺は1人外を見ていた……。やがて太陽が沈み、部屋が暗くなってもまだ俺は外を見ていた。

何も考えずに……。

何も考えず・・・（後書き）

こんにちは、山口です。今回20話を迎える事になりました。この小説を読んで頂き、本当にありがとうございます。これから地道にがんばっていきますのでよろしくお願い致します。また、同時に連載中の「これも恋の始まり？」もよろしくお願い致します。

山口維音

女の戦い

気がつくともう夜中だった・・・。

店へ行こうと、キーとジャケットを持って廊下を歩いていた時だった。

「真夜？何してるの？」

聞き覚えのある声にビクツとしながらも後ろを振り返ると、予想通りやはり“葉山美岬”だった。

どうしてここに？というよりも、何時まで起きているんだよ・・・こいつは。そして、またサラリと人の事呼び捨てにしやがって・・・俺の方が年上なのですが・・・。

「ねえ、どこ行くの？どこ行くの？」

パタパタと俺の方に寄って来ると、周りを考えてか小さな声で尋ねてきた。

「トイレだよ、トイレ！わざわざ聞くなよ・・・」

「部屋の中にあるじゃん」

「たまには・・・外のトイレにも行くんだよ」

「バイクのキーとジャケットを持って？はあ・・・どこまで行くの？」

うっ・・・思わず言葉が詰まってしまった。

「どこだっついていいでショ？ほら、さっさと小便して寝な」

外に出て単車に乗ったが、しつこくガキはついてきていた。一体何を考えているのか・・・。

「何ついて来ているんですか？もう遅いから寝ましようね」

ニッコリ笑いながら言ったが、ガキは首を横に振りながらその場に突っ立っていた。ホント一体何を・・・ああ一緒に店に行く気っスね。冗談じゃないですよ・・・一応念の為に聞いてみようか・・・。

「もしかして、一緒に行きたいとか思っていないませんか？」

俺の言葉にガキは目を輝かせて、大きく頷いた。ああ、やつぱりね……そうだと思いますよ……って感心している場合じゃねえよ！

「何、言っただ！お前は病人なんだ。連れて行ける訳ねえだろ？お前も頭の中に少くくしだけ残っている脳でそれ位考えろよ。馬鹿だけど、それ位はわかるでしょ？」

「私、バカだからわかんない！」

あ……ああ言えばこう言う女だな、オイっ。ホントいちいち逆らいやがって……。俺は単車にまたがると、ガキの方を見て

「俺は行くからな！部屋に戻るなり、待つなり、死ぬなり勝手にしろ！」

そう言い残すと、単車を走らせた。ガキがただ呆然と立っていたのを、カーブを曲がる時にチラッと見えた。

俺は知らないからな……。あの女がどうなろうが……。

店のドアを開け、階段を下りていきカウンターでカイから酒を受け取りそのままソファに座ると、カオルがやって来た。以前まではこれが物凄く嫌で嫌でたまらなかったが、昼に会った時からはいいつに對する俺の感情も変わっていった。

「ちよつとカオル、テメーの間真夜にあれだけ嫌がられたクセにまだ懲りてない訳？」

「そうそう！最近アンタ真夜の側にいてウゼーよ」

「ああ、わかった！この間、真夜にキスされたから有頂天になってるんだ！キモッ」

カオルに俺の取り巻き共が近付いてきた。こいつらも、まあ俺の彼女ヅラされてウザイって前から思っていたのですが……。馬鹿だから気付いていないだろうな。

「こうして見ると、僻みの集まりで……。バカバカしい」

カイが後ろからグラスと氷を持ってきて呟いた。

「何？僻んでいるわけ？あんたら3人じゃないと、あたしに文句も言えないの？」

おお・・・カオルも負けてねえな。俺はケイゴを手招きし、カイと3人で“女の戦い”を観戦していた。

「何だって！誰に向かって言ってるんだよ！」

「あ？テメーらに決まってるんだろ？もしかしてホントにバカじゃねえの？うわ・・・最悪」

「何だって！この女・・・」

3人の中のリーダー格であるチカがカオルに殴りかかろうとしたので、仕方なくその手を掴んだ。

「真夜あ！何で止めるの？」

「お前ら、何か醜いですよ・・・。カオルがそんなに羨ましいなら真夜の側に来たらいいじゃねえか」

ケイゴの言葉にうんうんと頷いていた俺だったが、俺の側に来たら・・・という所に引っかけりを感じた。やめろよ・・・ウザイのに。

「ダメなんだよ！そう簡単に真夜の側に行ったら。馴れ馴れしくしてもダメなんだから」

チカの言葉に思わずカイが吹き出していた。俺は神様かよ・・・。

「ていうか、お前ら俺の事を呼び捨てにしている時点で、充分馴れ馴れしいですよ」

すると、3人は思わず顔を赤くしていた。

「・・・ああ、そう。じゃあ、カオル少し我慢してくれる？」

カオルは頷くと俺から離れ、奥にいるカオルのダチの方へと去っていった。

「ホントおもしろいね、お前の取り巻き共とカオルの女の戦争？お前、いつから神様に昇格したの？」

ケイゴは必死に笑いを堪えていた。そんなケイゴに俺は軽く蹴りを入れた。まったく・・・勝手に人の事でケンカしてんじゃねえよ。俺が笑い者になるだろうが・・・！

客も帰っていき、店には俺とケイゴとカイが残っていた。

「真夜、まだ“例のヤツ”しているのか？」

「当たり前だろ？俺がそんな簡単にやめる訳ねえだろ！」

例のヤツというのは、ババアのことだ……。以前、俺が2人に全てを話したときにこのことも話した。2人は俺のやる事に口出しはしないと言った。それは当たり前だ……。止める権利など、2人にはないのだから。

「そして、水原の方はどうなんだ？」

この店の主でもあるカイに尋ねたが、カイはただ首を横に振っていた。その反応に安心したが、不安もあった。

ここに来なくなったのは助かるが、もし本当に他の場所を探しているのなら……。いつかは、サナトリウムにも……。以前はバカにしていたが、よく考えるとあいつの権力は俺が思っている以上に大きいのだ。

「大丈夫だ、そう心配する事はねえよ」

俺の不安そうな顔を見て、ケイゴは俺の背中を軽く叩いた。そんな2人に俺はただ笑い返す事しか出来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1276a/>

君が僕にくれたもの

2010年10月12日13時45分発行